

2025年度 健康メディカル学部理学療法学科

学修行動と学修成果の調査アンケートの解析

理学療法学科のディプロマポリシーとして①幅広い教養とコミュニケーション力を発揮し社会人として自立できる力を有している、②理学療法士としての使命・責任・態度そして社会・職業倫理観を基に、クライアントとの信頼関係を構築し、多職種との連携を築く、③科学的知識に立脚した理学療法を実践し、更に新たな知識への探求心・研究心を身につける、④国内外に対する見聞を広め、その地域特性に応じた関わりを見出す、と掲げている。とくに①②は社会に出るうえで必須の能力である。そこで全学年を対象とした I. 学修行動と学生生活においては①に重点を置き、全学年を対象とした II. 学修成果については①～④に重点を置いて調査結果を分析した。

＊2024 年度より新たな設問が追加されたことから、2023 年度と 2024 年度以降の設問番号は一致しない。

＊2025 年度より設問 1～50 では、5 択から 4 択へ変更となった

<I. 学修行動と学生生活について>

設問 7 授業の予習や復習、授業課題のための勉強

昨年度までの「かなりした」の項目が無くなり、「時々した」に組み込まれた結果になったと考えられる。一昨年度に比べ、「頻繁にした」の合計が漸増し、「あまりしなかった」「全くしなかった」と回答した学生の割合は漸減傾向にある。今後は「時々した」と回答した学生をより頻繁に予習・復習に向かわせる働きかけが引き続き必要である。

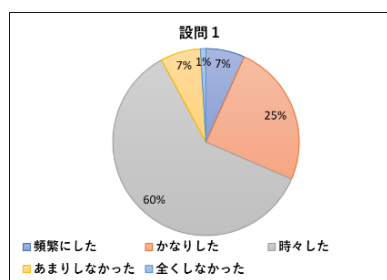


図1 設問1 2023年度

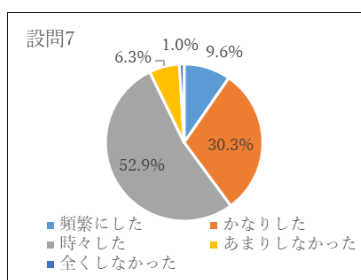


図2 設問7 2024年度

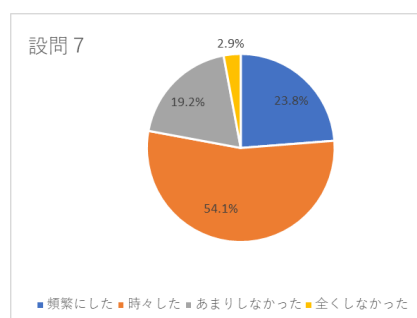


図3 設問7 2025年度

設問 8 学修支援システム（「manaba」）を利用した勉強

昨年、一昨年度に比べ利用者数が上昇したかに思われたが、「あまりしなかった」「全くしなかった」学生は全体の24%程度に増加した。単に学生側の利用意欲の問題として捉えるのではなく、システム側のユーザーインターフェースにも要因がある可能性が考えられる。具体的には、スマートフォン専用アプリがなくブラウザベースでの利用に限定されていることや、プッシュ通知機能が十分でない点が、日常的な利用のハードルとなっている可能性がある。また、コメントのやりとりが掲示板形式であり、即時性や気軽さに欠ける点も、学生・教員双方にとってコミュニケーションの取りづらさにつながっていると考えられる。その結果として、教員側も manaba を主たる情報共有ツールとして活用するのではなく、より利便性の高い Teams 等のツールを併用する傾向が生じている可能性がある。これは単なる運用の逸脱ではなく、学生の行動様式や情報取得習慣に適応した情報設計を、教員側が意図的に行っているとも解釈できる。

したがって、今後の改善においては、manaba の利用促進そのものを目的とするのではなく、学生にとって情報にアクセスしやすい環境をどのように設計するかという観点が重要である。すなわち、ツールの統一に固執するのではなく、実際の学習行動に即した柔軟な情報提供体制の構築が求められる。この結果を学科教員と共有し、必要に応じて対応する。

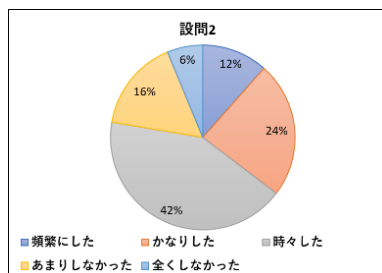


図 4 設問 2 2023 年度

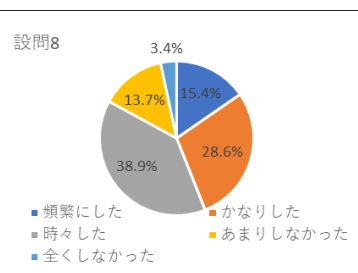


図 5 設問 8 2024 年度

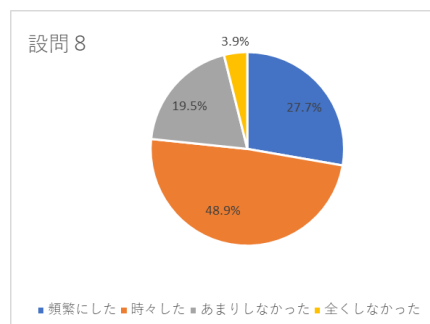


図 6 設問 8 2025 年度

設問 9 授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問や要望

昨年度、一昨年度と比較し、「頻繁にした」「かなりした」と回答した学生が、一昨年の 14%、昨年の 20%、2025 年度は 10%と大きく昨年度より減少したが、「時々した」に一定の回答割合が移行したものと考えられる。その一方、教員に「あまり相談しない」あるいは「まったくしない」割合が 47%→37%→47%と学年によって変動する傾向がある。

教員への質問行動の減少については、単純に学習意欲の低下と捉えるのではなく、複数の視点から解釈する必要がある。まず、学生の自己解決力の向上により、必ずしも教員に依存しなくても課題を解決できるようになっている可能性が考えられる。例えば、4 年生において国家試験に関する質問が大幅に増加していないにもかかわらず、合格率が高水準を維持している点は、自律的な学習が一定程度機能していることを示唆している。

また近年では、生成 AI の普及により、学生にとって AI が「心理的安全性の高い相談先」として機能している可能性もある。教員に対しては質問や発言に対する評価を意識する一方で、AI に対してはそのような心理的負担が少なく、気軽に反復的な質問や確認が行える環境が整っている。このような変化は、従来の教員中心の支援構造に対して新たな学習行動の在り方を示しているといえる。

これらを踏まえると、今後は単に「質問数の増減」を評価するのではなく、学生が実際に「どこで問題を解決しているのか」を可視化する視点が重要となる。すなわち、教員、友人、AI など、複数のリソースを含めた学習支援ネットワーク全体の中で、学生の問題解決行動を捉える必要がある。

さらに、このような環境変化に対応するためには、教員の役割そのものの再定義が求められる。従来のように知識や正解を提供する「回答者」としての機能に加え、学生の思考過程を支援し、問題の捉え方や解決の道筋を導く「思考支援者」としての役割へと転換していくことが重要である。これにより、AI や学生同士の学習と相補的に機能する、より高度な教育支援体制の構築が期待される。

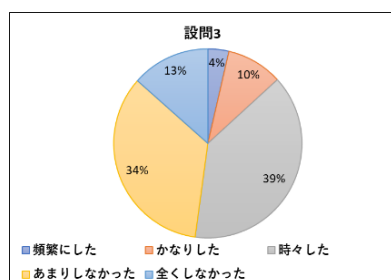


図 7 設問 3 2023 年度

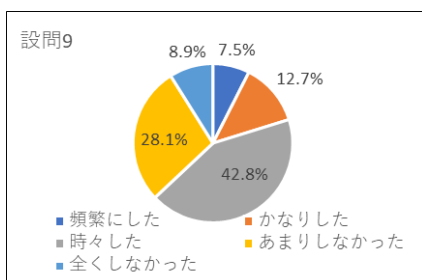


図 8 設問 9 2024 年度

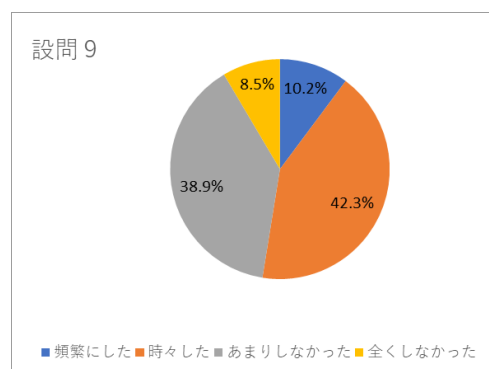


図 9 設問 9 2025 年度

設問 11 友人と一緒に勉強

昨年、一昨年と比較して「頻繁にした」「時々した」の割合は高く、昨年度まで「かなりした」の層が「時々した」に含まれると思われる。「あまりしなかった」「全くしなかった」はやや増加した。学生同士の関係性が年々良くなっている一方で、クラスづくりが成功しているといえる。その一方、設問 39「学内の友人関係の悩み」に「ある」と回答している学生が約 14% 存在することから、コミュニケーション力を必要とする本学科の臨床教育に向けた介入が早い段階から必要といえる。

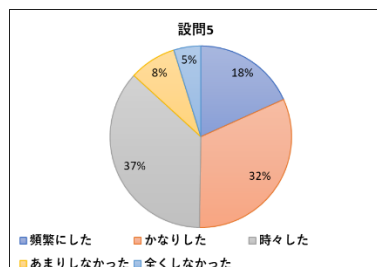


図 10 設問 5 2023 年度

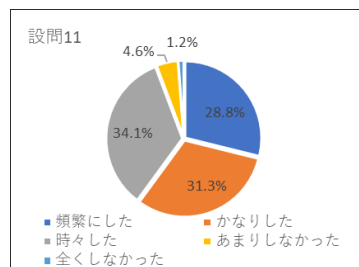


図 11 設問 11 2024 年度

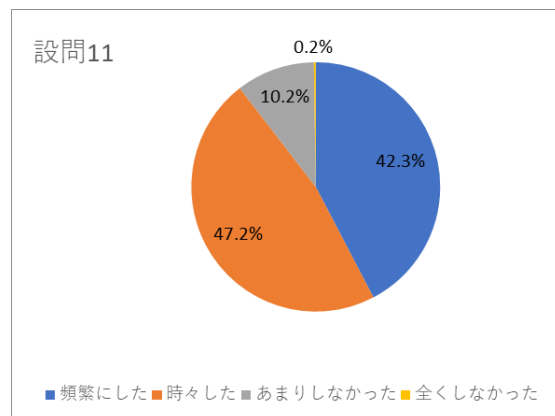


図 12 設問 11 2025 年度

設問 12 メディアライブラリーセンター(図書館)を利用した勉強

昨年、一昨年と比べて「あまりしなかった」「全くしなかった」は増加傾向である。ただし学年別に見ると、年次があがるにつれて「頻繁にした」が上昇している。レポート課題等はインターネットや AI を利用する学生も多く、図書館の利用は臨床実習に向けた準備や国試対策の学習での利用が高学年での高い利用率に影響していると考えられる。

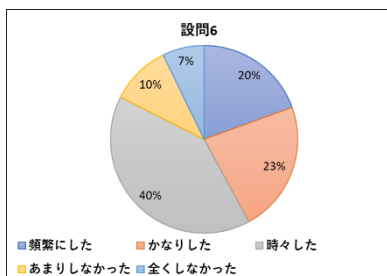


図 13 設問 6 2023 年度

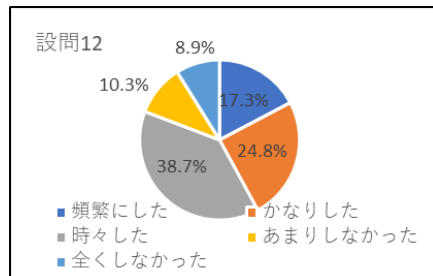


図 14 設問 12 2024 年度

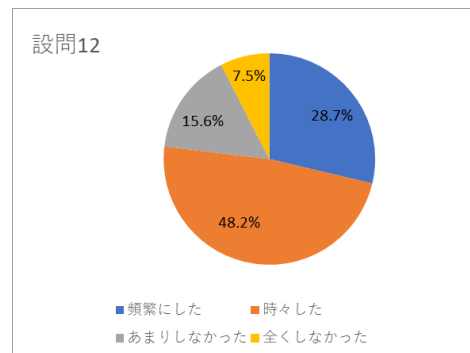


図 15 設問 12 2025 年度

設問 15 授業の内容

昨年、一昨年と比べ、「とても満足」と回答した学生が漸増している一方、「やや不満」「とても不満」と回答している学生は増加している。今後はこの約 10% の学生を「やや満足」に変えていく対策が必要である。

本分析では満足度を中心に評価が行われているが、その解釈には慎重さが求められる。一般に、教育内容が高度で厳密であるほど、学生にとっての理解負荷は増大し、一時的に満足度が低下する可能性がある。そのため、満足度の低さは直ちに教育の質の低さを示すものではなく、むしろ高い学習要求水準を反映している可能性も考えられる。

さらに、学習の深化や能力の獲得といった「成長過程」は、必ずしも主観的満足感と一致しない。むしろ、認知的葛藤や困難を伴う過程においては、成長と満足が逆相関を示す可能性も指摘できる。したがって、満足度のみを指標として教育効果を評価することには限界がある。

以上を踏まえると、今後の分析においては、満足度指標に加えて、客観的な学習成果や自己成長実感といった複数の指標を組み合わせたクロス分析が必要である。これにより、学生の主観的評価と実際の学習成果との関係性を多面的に把握し、教育の質をより精緻に評価することが可能となる。

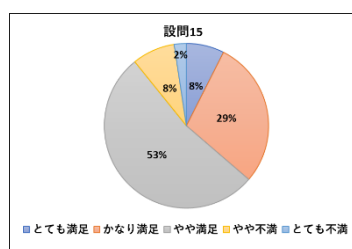


図 16 設問 15 2023 年度

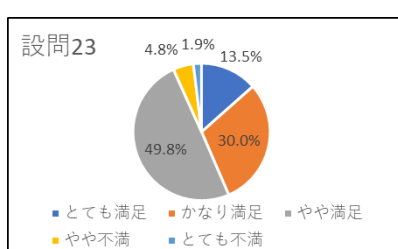


図 17 設問 23 2024 年度

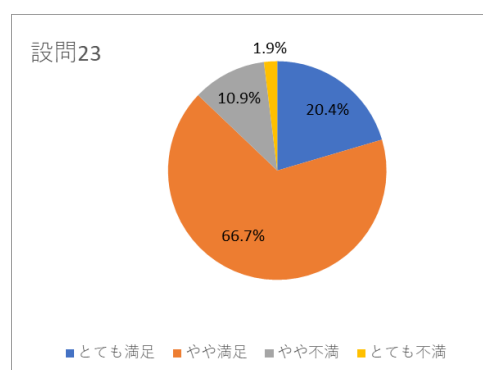


図 18 設問 23 2025 年度

設問 24 所属する学科・コースのカリキュラム

「とても満足」と回答した学生が大きく増加したが、「とても不満」と回答している学生は約 1%である。今後は「やや不満」と回答した約 8%の学生を「やや満足」に変えていく対策が必要である。

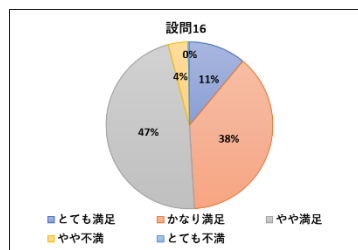


図 19 設問 16 2023 年度

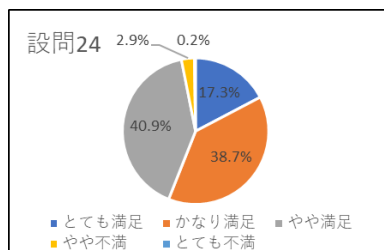


図 20 設問 24 2024 年度

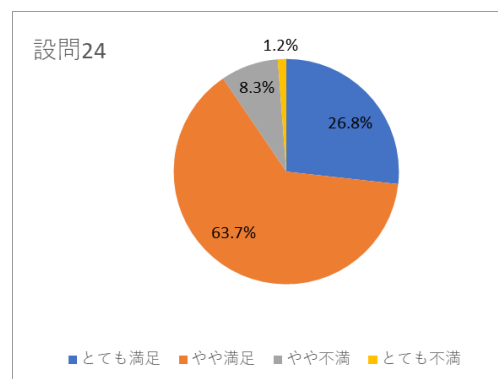


図 21 設問 24 2025 年度

設問 32 学科・コースの教員による指導・相談

大半が「満足」している一方で、「やや不満」「とても不満」と回答した学生が約 9%となり、全体の 30-40 名の学生が不満を感じていると推測できる。また設問 44「不安や悩みについて誰に相談するか」に対して「教員」と回答した学生の割合が、大学全体の数値 (2.9%) と比べてやや低い (2.2%)。1 年生と 4 年生は教職員に相談する割合が平均より高く、1 年生では大学生活や各科目に対する質問、4 年生では国家試験や就職活動に関する相談が背景にあるものと推測する。「相談する相手がいない」と回答した割合は大学全体 (2.1%) より低く (0.9%)、学内外の友人に相談することが多い傾向である。

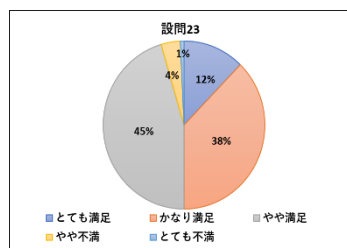


図 22 設問 23 2023 年度

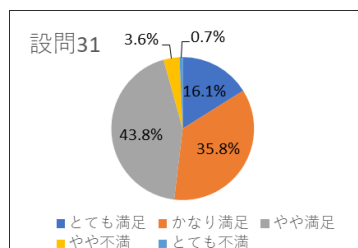


図 23 設問 31 2024 年度

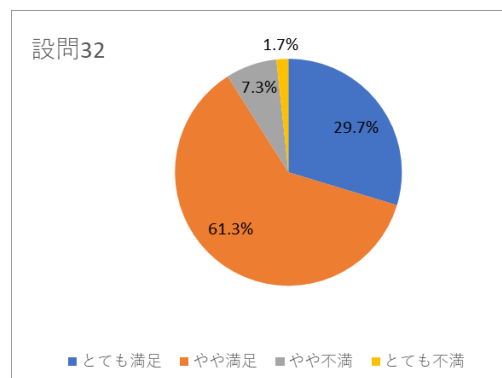


図 24 設問 32 2025 年度

設問 36 授業の内容についていけない

一昨年度、昨年度は「大いにある」「少しある」と回答した学生が 45%以上であったが、今年度は約 34%と減少しており、昨年度、一昨年度よりも改善傾向がみられた。授業についていけないと感じる学生は 1 年生に顕著であるが、この要因は単なる専門用語理解の問題に留まらない。医療系学科特有の高密度な知識構造に加え、大学における学習方法の未習得や認知負荷の増大が複合的に影響している可能性がある。

したがって、専門用語の平易化に加え、

- ・学習方法（ノートテイキング、復習方法）の指導
- ・知識構造の可視化（概念マップ等）
- ・学習段階に応じた負荷調整

といった「学習プロセスへの介入」が必要である。

授業についていけないと感じる 1 年生であっても、努力を重ねて 2 年生へ進級する学生が大多数であり、決して授業内容についていけない状況とは考えにくい。また、「授業についていけない」と後向きの質問項目によって回答を誘導していることも示唆され、「授業の理解度」として前向きな質問項目とする案も検討が必要である。

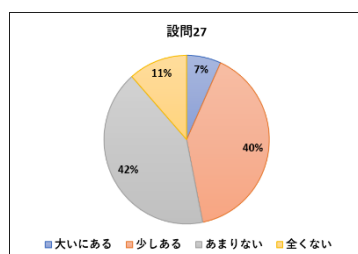


図 25 設問 27 2023 年度

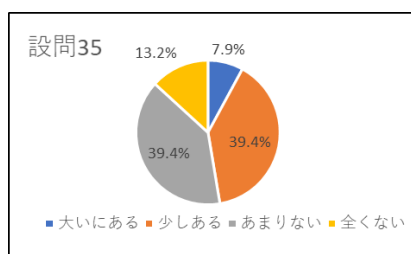


図 26 設問 35 2024 年度

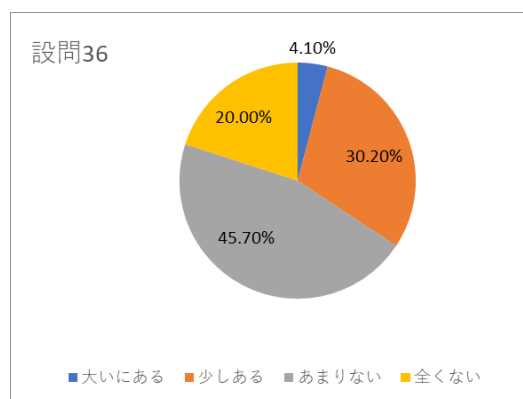


図 27 設問 36 2025 年度

設問 45 生成 AI をどの程度利用していますか。

「頻繁に利用」「時々利用」と回答した学生が半数以上であり、特にレポート課題が多くなる 2 年生から使用頻度が多くなる傾向である。

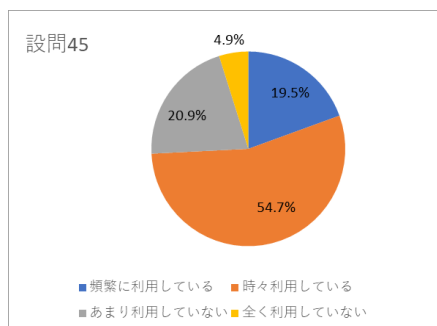


図 28 設問 45 2025 年度

<Ⅱ. 学修成果について> ※2025 年度のみ

実学の精神を基に教育を行っている医療系学部として、理学療法に関する知識・技術はおおむね満足できる結果であった。ここでは、本学が目標とする6つの力、および当学科ディプロマポリシーの①～④に関連する設問についての分析を中心にまとめる。

本学の目標とする6つの力：

- 設問1：人間愛（利他の心）
- 設問2：他者と協働する力
- 設問3：自立して逞しく生きる力
- 設問4：創造的な問題解決能力
- 設問5：専門性を高める意欲と力
- 設問6：我が国と世界の持続・発展に尽くす力

本学の目標とする力「十分付いた」「やや付いた」と回答した学生が約90%～98%である。医療に携わる者として利他心は必須の条件であるため、望ましい結果が出ているといえる。また翌年から社会に出る4年次までに、親や教育機関から自立し、収入を得て自活できる力が大学の使命である。さらに当学科では国際交流プログラムを2つ揃えているにも関わらず、設問6我が国と世界の持続・発展に尽くす力が、大学全体（約79%）よりもやや低値であった（約74%）。国際交流プログラムは選択科目や一部の履修者には深く理解することができると思われるが、全体への影響力は偏りがあるものと推測する。

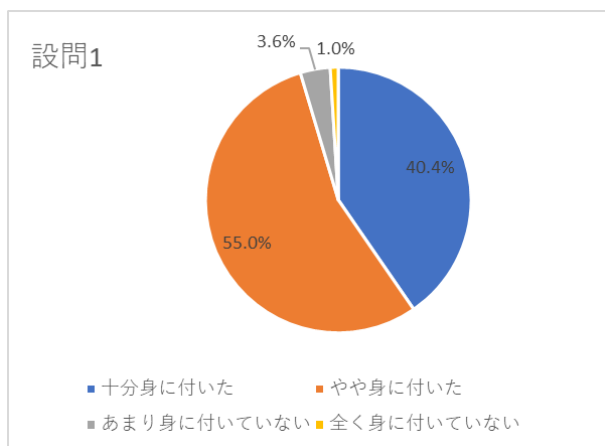


図 29 設問1 人間愛（利他心）

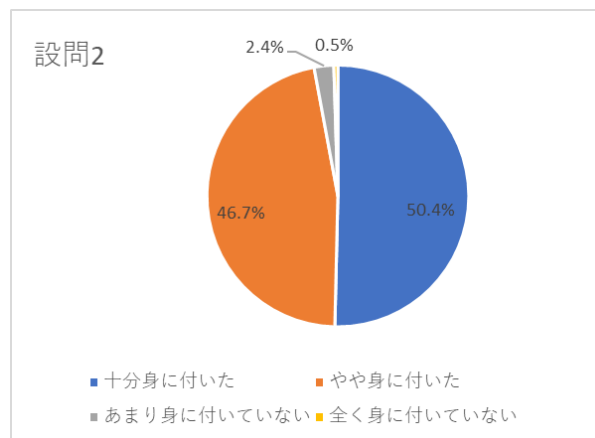


図 30 設問2 他者と協働する力

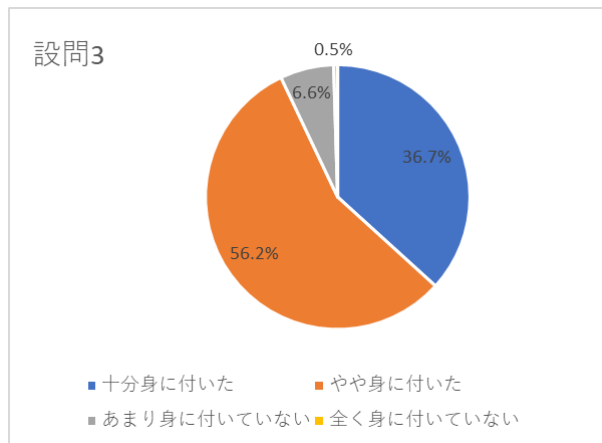


図 31 設問3 自立して逞しく生きる力

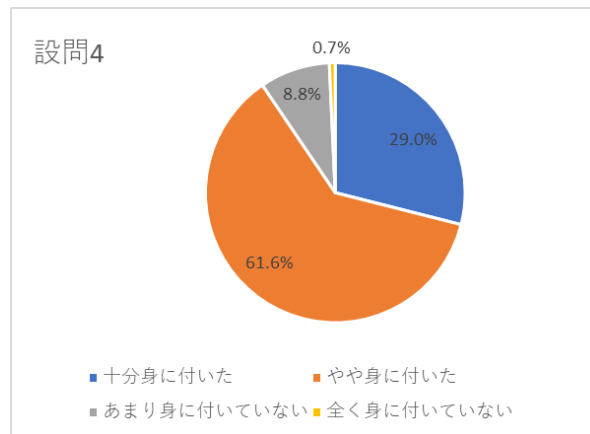


図 32 設問4 創造的問題解決能力

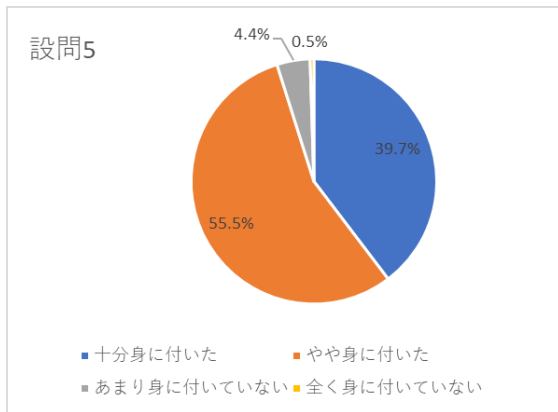


図 33 設問 5 専門性を高める意欲

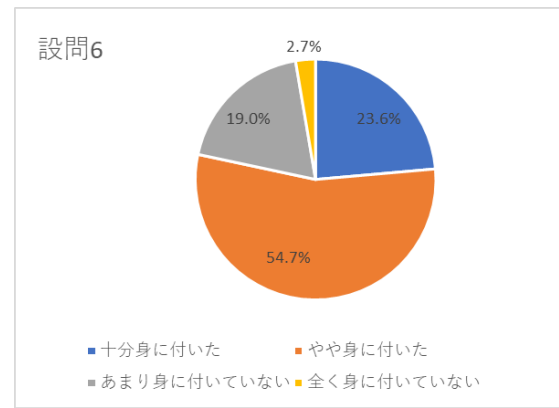


図 34 設問 6 我が国と世界の持続・発展に尽くす力

理学療法学科独自設問

設問 54 人とのコミュニケーションする力

設問 56 自ら課題を見つけて解決する力

これら 2 項目については「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」と回答した学生が大半を占め、概ねディプロマポリシー①を満たすことができたといえる。その一方、約 3-4%の学生は「あまり付いていない」「全く付いていない」と回答していることから、これらの学生に対する教育手法を見直していく必要がある。

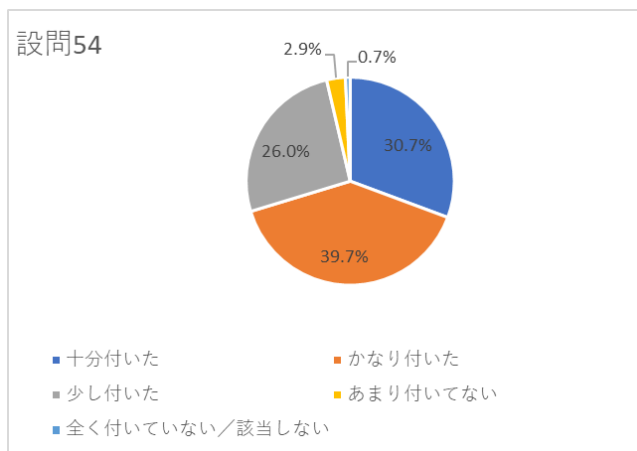


図 35 設問 54 コミュニケーション力

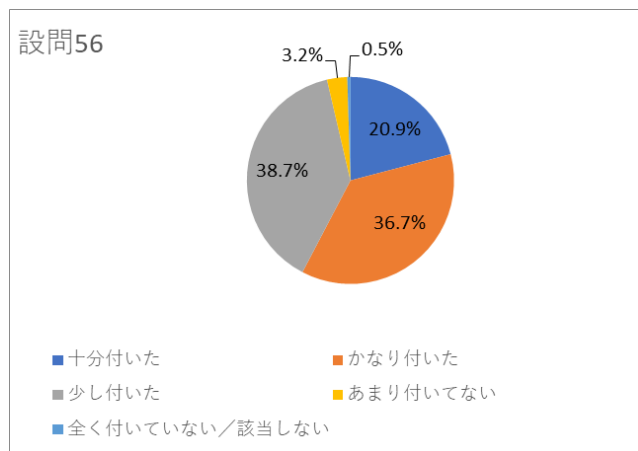


図 36 設問 56 課題発見・解決力

設問 60 規則や約束を守る態度

「身についた」と回答した学生が約 97%である。これに関しては 1 年次からセミナーを中心に指導を徹底しており、医療に携わる者として関連法規、病院施設の規定を守ることは必須である。今後は「少しついた」と回答した約 25%の学生を「かなり付いた」「十分付いた」に改善させるべく、教育手法を検討していく必要がある。

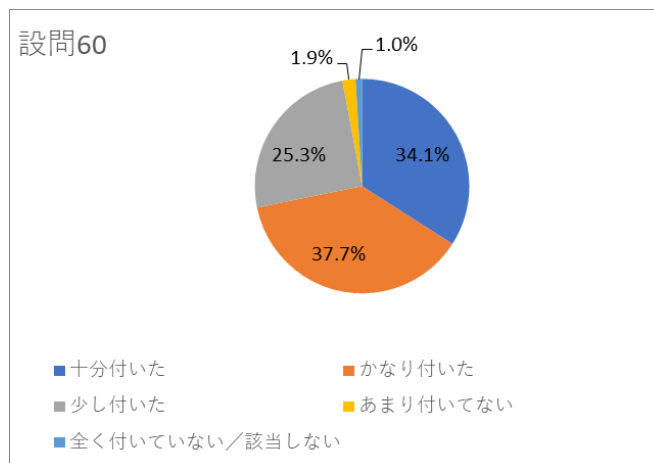


図 37 設問 60 規則や約束を守る態度

設問 61 健康や生活を自己管理する力

「身についた」と回答した学生が約 96%である。自己管理能力が低ければ、健康的に仕事や生活を継続することは難しい。患者の健康を管理することは一層困難となろう。今後は「身についていない」学生を、「少し付いた」に変え、「少し付いた」学生を「かなり付いた」「十分付いた」に改善させる方策を検討する必要がある。

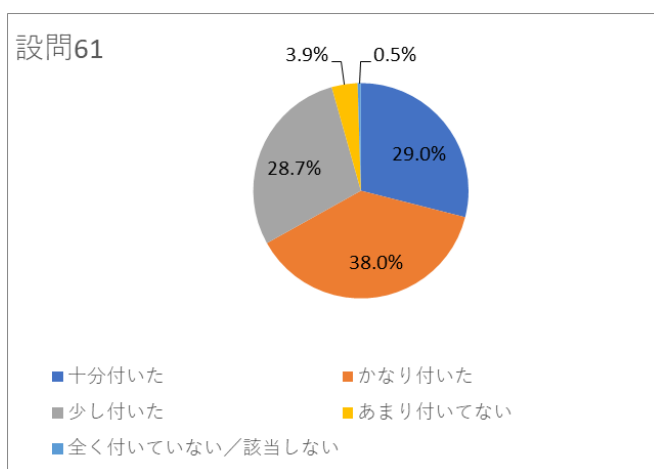


図 38 設問 61 自己管理能力

設問 67 信頼関係を構築する力

「あまりついていない」「全くついていない」と回答した学生は約 1.5%で、全体の約 75%が「十分付いた」「かなり付いた」と回答した。スタッフや患者との信頼関係の構築は、社会に出たときから重要であり、長く働き続けるための基礎でもある。今後は「少し付いた」と答えた学生を「かなり付いた」に改善させるための働きかけ（たとえばサークル活動やプロジェクト活動、グループワーク等）をより充実させ、他者とのかかわりから力をつける方策が必要かもしれない。

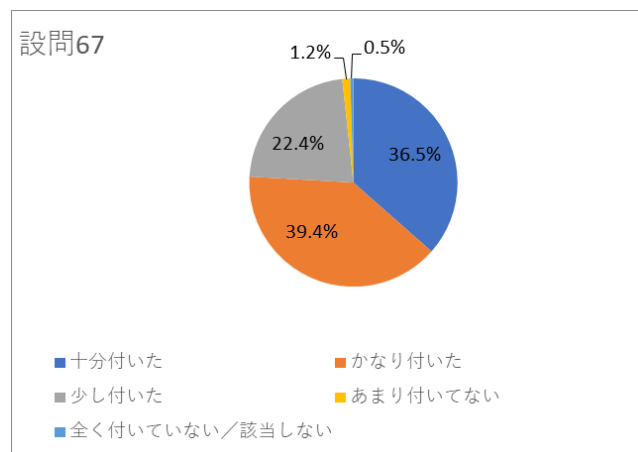


図 39 設問 67 信頼関係構築力

設問 78 理学療法研究への興味と関心

設問 79 理学療法を研究する意義の理解

設問 80 研究倫理への理解

設問 81 理学療法研究を行う基礎能力

これら 4 項目については 90%以上が「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」と回答したため、概ねディプロマポリシー③を満たすことができたといえる。その一方、選択科目である卒業研究を履修しない約 7 割の学生にとっては、興味関心、理解および基礎能力が身に着けることが難しかったようである。4 年次は長期臨床実習、国家試験対策、就職活動、一部学生は海外研修と学事が多数重なることから、卒業研究への取り組みに困難が伴う場合も少なくない。対策としては、3 年次に開講される必須科目「理学療法研究方法論実習 I, II」を通して、科学に基づく実践力を養う力、「理学療法治療学 I, II, III, IV」の座学と実習科目において、論理的思考力を養っていくことを検討していきたい。

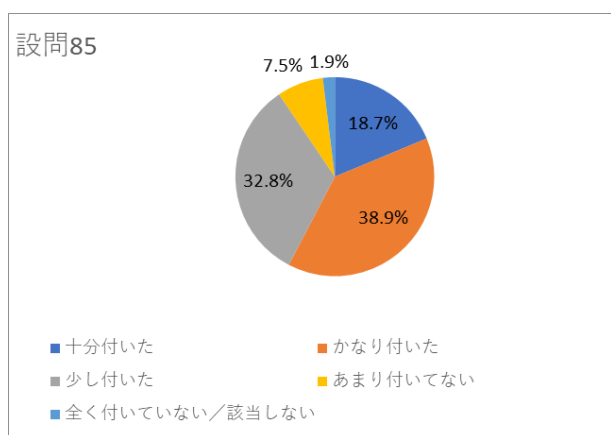


図 40 設問 85 研究への興味関心

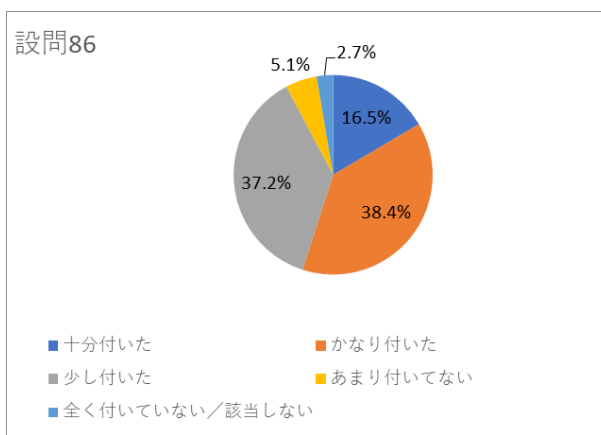


図 41 設問 86 研究意義の理解

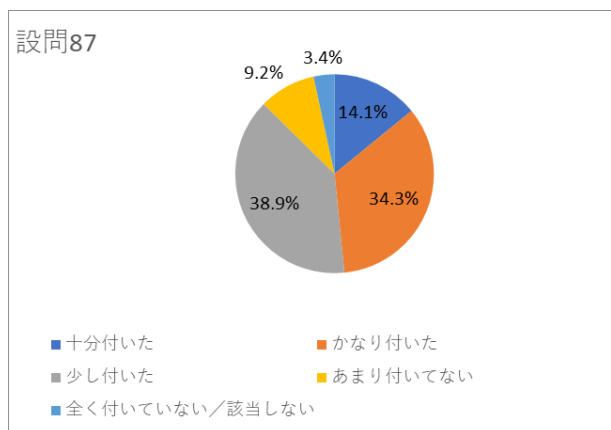


図 42 設問 87 研究倫理の理解

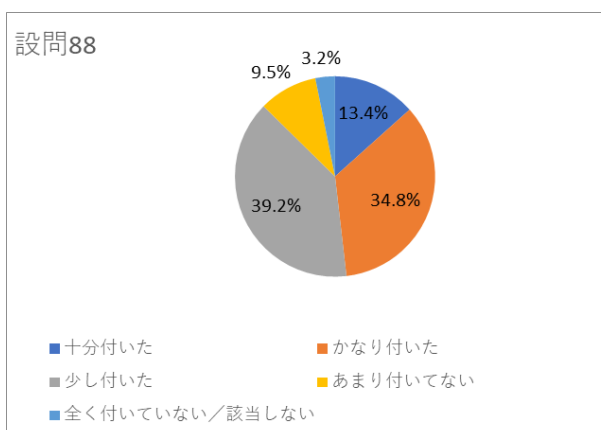


図 43 設問 88 研究を実施する基礎能力

＜Ⅲ．2025 年度のまとめ＞

本学が目標とする6つの力、および理学療法学科のディプロマポリシー①から④を概ね満たす結果が出ており、教育機関としての最低限の使命を果たしているといえる。また学生の学習時間、授業や教育方法に対する満足度、教員への相談なども昨年、一昨年と比べて増加していることから、学習に取り組む上での教員との信頼関係を一定のレベルで保つことができていると思われる。

その一方で、授業についていけない、と感じている学生数が他学科と比較しても多く、特に入学後間もなく専門科目を学んでいる1年生でこの傾向が顕著である。本結果は全体として概ね良好である一方で、1年生に課題が集中していると解釈されている。しかしながら、この考察には「学年進行に伴い学生は自然に適応し、課題が解消されていく」という前提が含まれている可能性がある。

この前提に立つと、2年生以降で数値が改善していることは教育効果の結果と捉えられるが、必ずしもそれだけで説明できるとは限らない。別の視点として、1年次に学習困難を感じた学生の一部が、留年や退学、あるいは学習意欲の低下などにより調査対象から実質的に離脱している可能性が考えられる。

この場合、上級学年における数値の改善は「成長」の結果ではなく、「困難を抱えた層の不在」によって生じている可能性がある。すなわち、現状の横断的なデータのみでは、学生の成長過程を正確に評価できていない可能性がある。

4年生の『大学への満足度』は90%以上と高く、2・3年生の85～90%の満足度と比較してやや高い割合であった。『授業についていけない』との回答は1年生から学年が上がるにつれて減少しており、9週間の臨床実習Ⅲの履修を終えた4年生は、臨床実習を通して臨床症例を通じた学修を経験し、大学での学びが臨床現場での実践応用に対し知識の理解に繋がっているものと考えられる。さらに国家試験合格に向けた学習環境と対策も実施されていることから、知識理解が学修意欲につながり、意識が高まっているものと推測する。

以上を踏まえると、今後の分析においては、単年度・学年別の比較に留まらず、同一個人を追跡する縦断的なデータ分析が必要である。個々の学生がどのように学習上の困難を乗り越えているのか、あるいはどの段階で離脱しているのかを可視化することで、教育効果と選抜効果を区別して捉えることが可能となる。こうした分析を通じて、真に支援が必要な層を特定し、より適切な教育介入につなげていく必要がある。

健康メディカル学部 理学療法学科

学科長 加藤 勝行

教務委員 玉利 光太郎

教務委員 宮崎 学

教務委員 宮本 浩樹

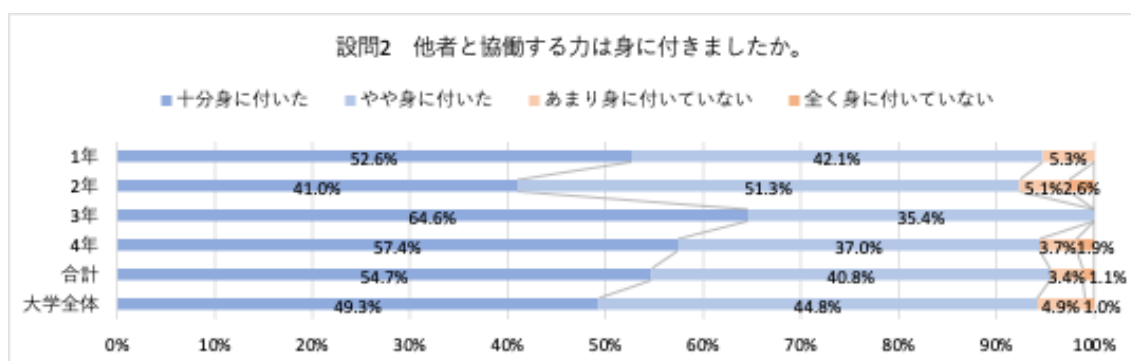
2025年度 健康メディカル学部作業療法学科

学修行動と学修成果の調査 アンケートの分析

作業療法学科のディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーを念頭に、到達度と今後の課題を検討したので報告する。

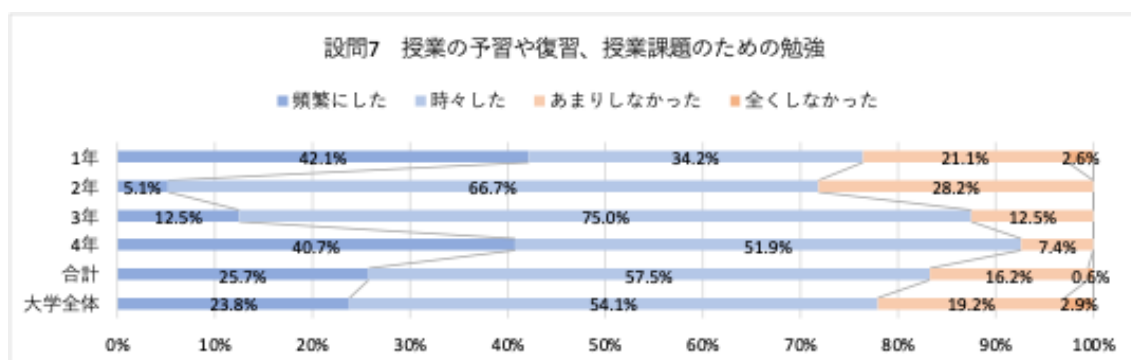
I. 本学の「目標とする力」(設問1～6)

本学の目標とする力については、全体的に「やや身に付いた」を中心とした肯定的評価が多く、特に「協働する力」や「人間愛」は高い到達度を示している。学年が進むにつれて「十分身に付いた」の割合が増加しており、教育課程を通じた段階的な成長が確認できる。一方で、「持続・発展に尽くす力」や「創造的問題解決能力」については、他項目と比較して「あまり身に付いていない」とする割合がやや高く、抽象度の高い能力の定着には課題が残る。特に低学年では実感が持ちにくい傾向があり、具体的経験と結びつけた教育の必要性が示唆される。



II. 授業関連の学修(設問7～13)

授業に関連する学修行動では、「友人との学習」や「学修支援システムの活用」は比較的活発であり、協働的な学習環境が形成されていることがうかがえる。一方、「予習・復習」は学年差が顕著で、1・2年生では実施頻度が低く、4年生になるにつれて増加する傾向が見られる。これは資格試験や実習に向けた学習の影響と考えられる。また、教員への質問行動は全体としてやや消極的であり、主体的な学修行動の促進という観点では改善の余地がある。図書館や自習室の利用についても「頻繁に利用している」割合は限定的であり、学習環境の活用促進が課題である。



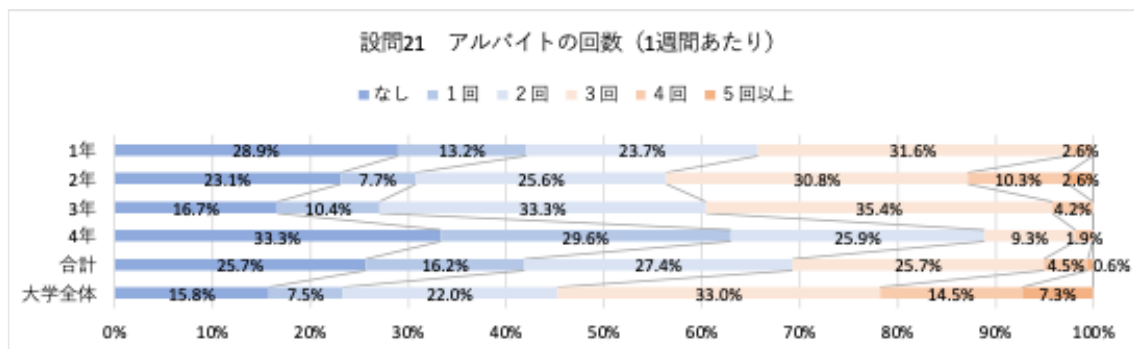
Ⅲ. 時間の使い方（設問 14～18）

学修時間は全体として「1～2 時間」が中心であり、特に低学年では短時間にとどまる傾向が顕著である。一方で4 年生では「3 時間以上」の割合が大きく増加しており、学年進行に伴う学修量の増加が明確に確認できる。学内滞在時間についても学年が上がるほど長くなる傾向があり、大学内での学修活動が中心となっている。睡眠時間は「5～6 時間」「6～7 時間」が中心で大きな問題は見られないが、読書時間については全学年で「1 時間未満」が多数を占めており、学修の幅を広げる取り組みが求められる。また、趣味・娯楽の時間は適度に確保されているものの、学修とのバランスに個人差があると考えられる。

設問14 授業時間外に行った予習や復習、授業課題のための学修時間（1日あたり）									
学年	8時間以上	7～8時間	6～7時間	5～6時間	4～5時間	3～4時間	2～3時間	1～2時間	1時間未満
1年	2.6%	0.0%	5.3%	0.0%	0.0%	2.6%	21.1%	50.0%	18.4%
2年	2.6%	0.0%	0.0%	5.1%	0.0%	15.4%	38.5%	25.6%	12.8%
3年	2.1%	0.0%	0.0%	2.1%	4.2%	6.3%	37.5%	33.3%	14.6%
4年	1.9%	1.9%	7.4%	13.0%	16.7%	25.9%	13.0%	18.5%	1.9%
合計	2.2%	0.6%	3.4%	5.6%	6.1%	13.4%	26.8%	30.7%	11.2%
大学全体	3.1%	1.7%	2.6%	4.1%	5.1%	9.0%	18.3%	31.3%	24.7%

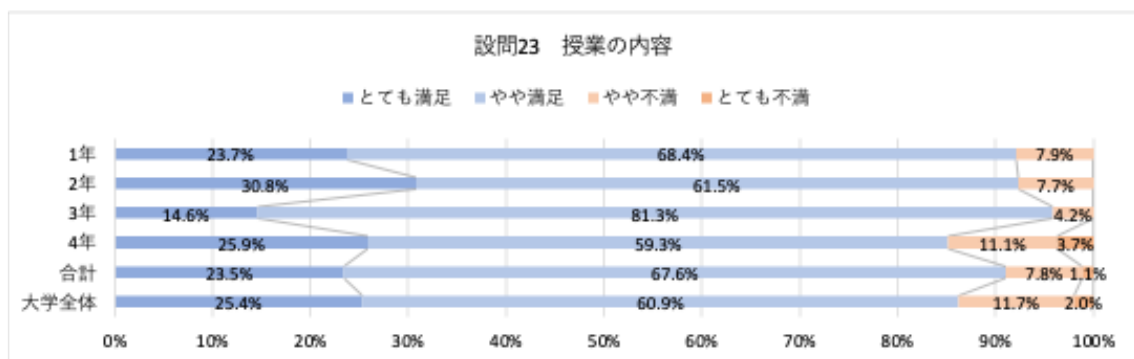
Ⅳ. 授業外活動（設問 19～22）

授業欠席は「なし」が多数を占め、出席状況は良好である。一方で、アルバイトは多くの学生が週に複数回行っており、特に高学年でも一定の割合で継続されている。これは学修時間への影響が懸念される要因である。部活動やサークル活動は参加率がそれほど高くなく、課外活動への関与は限定的である。また、ボランティア活動については「1 回以上」の経験は一定数見られるものの、継続的な参加は少なく、社会参加機会の拡充が必要と考えられる。



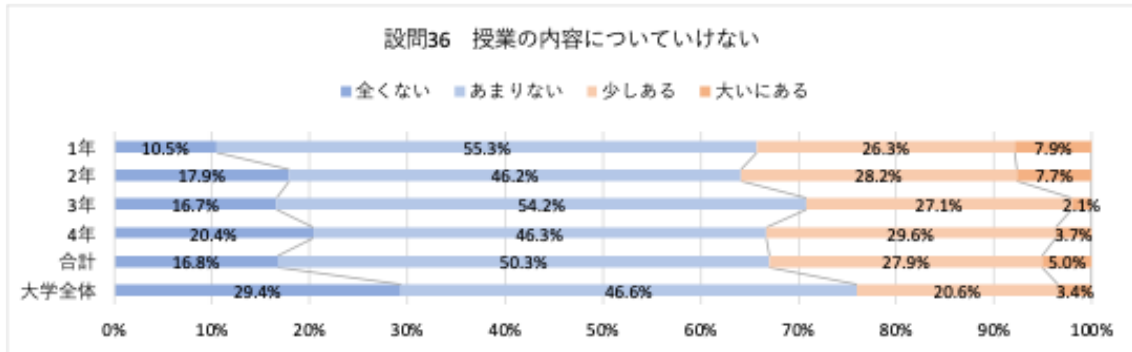
V. 教育満足度（設問 23～35）

教育内容や設備に関する満足度は全体的に高く、「とても満足」「やや満足」が大半を占めている。特に授業内容や教員の指導、実習設備については安定して高評価であり、教育環境は良好といえる。一方で、「学生生活」や「一部設備」に関しては学年によってばらつきが見られ、特に3・4年生ではやや満足度が低下する傾向がある。また、大学全体の総合評価では「やや不満」の割合も一定数存在し、細かな改善の積み重ねが求められる。



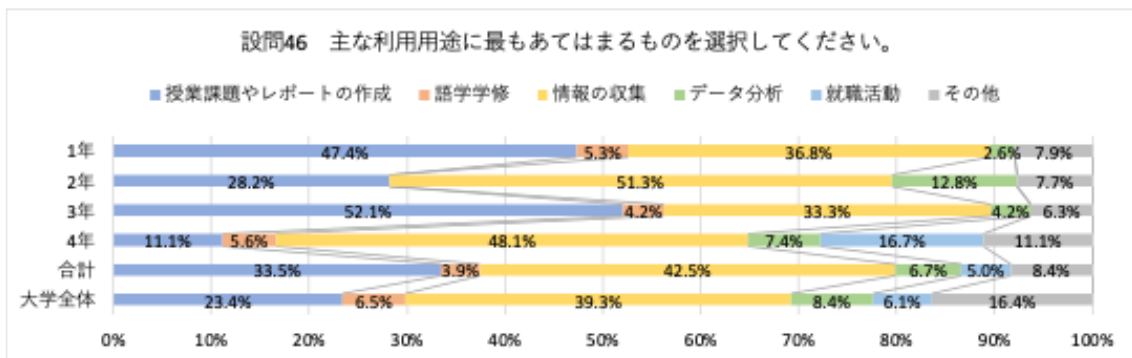
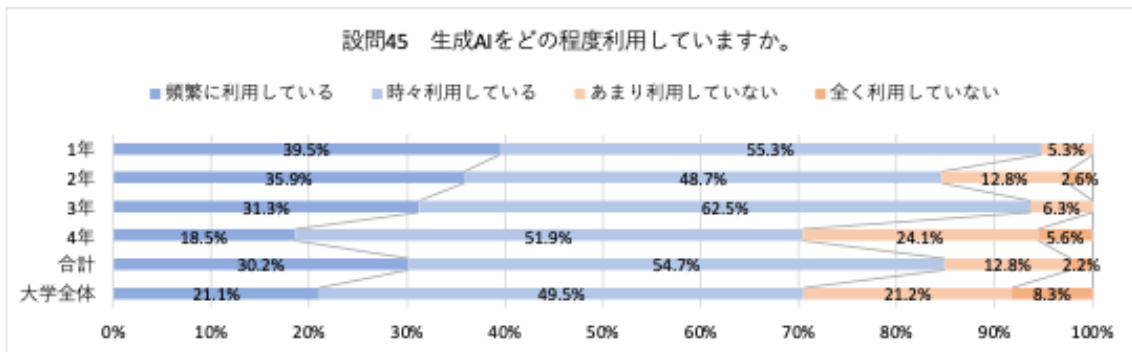
VI. 不安・悩み（設問 36～44）

不安や悩みについては、「授業についていけない」「将来の進路が不明確」といった項目で「少しある」とする回答が一定数見られ、特に中学年で顕著である。一方で、人間関係や家庭に関する悩みは比較的少なく、対人関係の安定は確認できる。経済的不安は一定割合存在しており、支援体制の重要性が示される。また、相談相手としては「友人」や「家族」が中心であり、「教職員への相談」は相対的に少ないため、相談しやすい環境づくりが課題である。



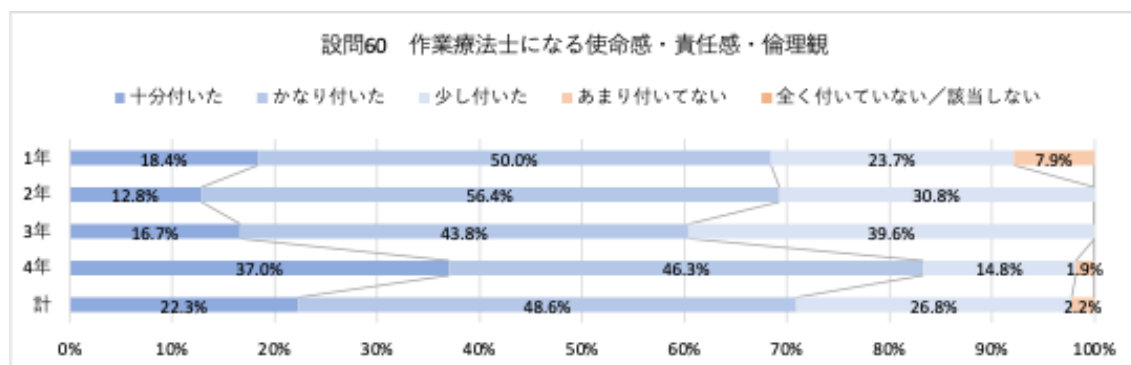
VII. デジタルツール・生成 AI（設問 45～50）

生成 AI の利用は全体として進んでおり、「頻繁に利用」「時々利用」を合わせると多数を占める。用途としては「レポート作成」や「情報収集」が中心であり、学修支援ツールとして定着しつつある。一方で、出力結果の検証については「常に確認している」割合が十分とはいえず、リテラシー教育の必要性が示唆される。また、AI 活用を将来必要と考える学生は多く、肯定的な認識が広がっている。オープンバッジについては認知度が低く、制度の周知が課題である。



VIII. 学科独自設問 大学入学時と比べて身についたと感じる「能力」（設問 51 以降）

能力の到達度については、学年が上がるにつれて「十分付いた」「かなり付いた」の割合が増加しており、教育の成果が段階的に現れている。特に「倫理観」「責任感」「対人理解」などの専門職としての基盤能力は高い水準にある。一方で、「発表力」「研究的思考」「自己管理能力」などは相対的に伸びが緩やかであり、継続的な育成が必要である。また、専門知識に関しては 3・4 年生で大きく向上しているが、低学年では「少し付いた」ととどまる項目も多く、基礎教育の強化が重要である。



IX. 4 年生における成長実感と満足度

4 年生の回答結果に着目すると、「十分身に付いた」および「やや身に付いた」とする割合が多く、学修を通じた成長実感が明確に表れている。特に、専門性や対人関係能力、倫理観といった専門職としての基盤的能力においては高い到達度が確認されており、教育課程全体を通じた学びの成果が十分に発揮されているといえる。

また、授業や実習を含めた学修経験を通じて、自己の能力向上を実感している学生が多く、学修成果と成長実感が結びついている点が特徴的である。これは、臨床実習や国家試験に向けた学修過程が、知識・技能の定着だけでなく、専門職としての自覚の形成にも寄与していることを示している。

さらに、これらの結果から、教育内容や学修支援に対する満足度も全体として高い水準にあることがうかがえる。その一方で、一部には到達度を十分に実感できていない学生も存在しており、個々の学修状況に応じたきめ細かな支援の継続が引き続き求められる。

まとめ

2025 年度の調査結果から、作業療法学科の学生は学年進行に伴い着実に学修成果を高めており、特に専門職としての基礎能力や倫理観の形成は良好に進んでいることが確認された。一方で、低学年における学修習慣の未定着、読書習慣の不足、将来に対する不安といった課題が継続して存在している。また、生成 AI など新しい学修手段の活用は進んでいるものの、適切な活用能力の育成が必要である。

加えて、4年生の回答結果に着目すると、「十分身に付いた」および「やや身に付いた」とする割合が高く、学修を通じた成長実感が強く示されている。特に、専門性や対人関係能力、倫理観といった専門職としての基盤的能力において高い到達度が確認されており、臨床実習や国家試験に向けた学修の成果が反映されていると考えられる。これらの結果から、教育課程全体を通じた学びに対する満足度も高い水準にあることがうかがえる。

今後は、初年次教育の強化、キャリア支援の早期化、主体的学修を促す教育設計を通じて、より高い学修成果の実現が求められる。

2025年度 健康メディカル学部言語聴覚学科

学修行動と学修成果の調査の分析

言語聴覚学科では、全学科共通設問に加え、ディプロマポリシー（以下DP）に関連する内容の習得状況を学科の独自項目としてアンケートを実施した。

1. 授業関連について

授業（共通設問7～13）について分析した。「授業の予習や復習」は、1～4年生の「頻繁にした」割合は、それぞれ10.2%、12.2%、19.0%、67.7%で、低学年時には学修習慣があまりついていない学生が多い一方、4年次になると学修習慣が身についていることが示された。1～2年生で学ぶ必修科目の多くは言語聴覚士国家試験と関係しているため、低学年から授業の予・復習を習慣付ける指導が必要と考えられた。

また、4年次になると、教員への質問（1年：26.5%、2年：22.0%、3年：33.3%、4年：71.0%）やメディアライブラリーの利用（1年：53.1%、2年：43.9%、3年：33.3%、4年：96.7%）が増加することから、学修に向かう意識の変化がうかがえた。

2. 設備、教育内容、学生支援について

大学の設備、教育内容、学生支援（共通設問23～35）について、満足（「とても満足」「やや満足」と回答した割合の合計）と不満（「やや不満」「とても不満」と回答した割合の合計）に分けて分析した。

設備について、「満足」と回答した項目は、「演習室の設備や器具」（1年：89.7%、2年：97.6%、3年：90.5%、4年：90.3%）、「メディアライブラリー」（1年：91.9%、2年：90.3%、3年80.9%、4年：96.8%）が高かった。一方、不満と回答した項目は、全学年平均で、「講義教室の設備（空調や照明を含む）」（満足80.3%、不満19.2%）、「学生食堂」（満足71.1%、不満28.8%）が高かった。学生がどのような点に不満を持っているのか、改善できる点はないか、継続して検討したい。

教育内容については、「授業の内容」（1年：75.5%、2年：78.1%、3年：80.9%、4年：93.5%）では、「満足」と回答した項目は、学年が上がるにつれて上昇した。また「カリキュラム」（1年：79.6%、2年：85.4%、3年：76.2%、4年：93.5%）は4年生の満足度が高かった。

学修支援については、「学科・コースの教員による指導・相談」は、「満足」と回答した学生の割合は、1年生：85.7%、2年生：82.9%、3年生：61.9%、4年生：90.3%であり、1～3年生と4年生とで大きく異なる結果となった。本学科では国家試験に向けて、4年生に対する少人数指導／個別指導に力を入れている。4年生の満足度はその成果の反映と考えた。

2年生から専門科目の学修が本格的に始まり、学修内容の量も増える。3. で後述するように、学生は学修についていけるか不安を抱えている。セミナーでの個別指導の他、各授業でもより丁寧な指導が必要と考えられる。

3. 学生の不安・悩みについて

学生の不安・悩み（共通設問36～44）について分析した。

「授業の内容についていけない（大いにある）」と回答した学生は1年生20.4%、2年生12.2%、3年生9.5%、4年生3.2%であった。1～3年生の1～2割が実際に授業内容の理解が不十分であり、低学年から授業や予習・復習を通して、内容理解につなげられるよう学修指導や支援を行う必要がある。

「身体面の健康状態への不安や悩みが大いにある」と回答した学生は、1年生：2.0%、2年

生:12.2%、3年生:9.5%、4年生:6.5%だった。「精神面の健康状態への不安や悩みが大いにある」と回答した学生は、1年生:8.2%、2年生:9.8%、3年生:4.8%、4年生:12.9%に上った。不安について、約85%の学生が友人・家族・教員等に相談しているが、誰とも相談しない学生も約10%いる。

セミナー等で個別に丁寧に聞き取りを行い、必要であれば専門機関への相談へつなげる等の対応をしていきたい。また、授業内容についていけない不安が身体的・精神的な不調を増悪してしまう可能性も考えられるため、学修支援を丁寧に行う必要もあると考えた。

4. 専門的な知識と技能の習得状況について

言語聴覚学科のDPに掲げるように、学科において習得がのぞまれる力について、学科独自項目(設問57～90)を設けてアンケートを実施した。言語聴覚学科におけるDPは、DP1:教養、人間愛にあふれる人格、DP2:コミュニケーション能力、社会性、倫理感、DP3:社会人として自立(律)する力、DP4:基礎知識、専門知識、DP5:臨床技能、DP6:研究、発信である。

表1に各学年のDPに関連する内容の習得実感を評定平均値で示し、学年間で比較した。

表1 各学年のDPに関連する内容の修得実感を評定平均値

DP	1年生	2年生	3年生	4年生
DP1 教養、人間愛にあふれた人格	3.7	3.6	3.6	3.9
DP2 コミュニケーション能力、社会性、倫理感	3.7	3.6	3.6	3.9
DP3 社会人として自立(律)する力	3.8	3.7	3.8	3.9
DP4 基礎知識、専門知識	3.3	3.3	3.3	3.7
DP5 臨床技能	3.0	3.2	3.3	3.7
DP6 研究、発信	3.1	3.2	3.3	3.6
平均	3.4	3.4	3.5	3.8

(学生は「5:十分付いた、4:かなり付いた、3:少し付いた、2:あまり付いていない、1:全く付いていない」の5段階で回答した)

1) DP1(教養、人間愛にあふれた人格)、DP2(コミュニケーション能力、社会性、倫理感)、DP3(社会人として自立(律)する力)の内容に含まれる基本的な基礎力については1年生の段階から「修得した」と感じていることが示された。

2) DP4(基礎知識、専門知識)、DP5(臨床技能)、DP6(研究、発信)については、学年があがるに従い、「修得した」という実感が高まり、カリキュラムに沿った修得状況となった。

3) DP5(臨床技能)、DP6(研究、発信)については、実習等を通して技能習得を意識することによって、高学年で修得を実感することが示唆された。

4) DP1～3については、初年次からの修得が可能であり、フレッシュセミナーを中心とした低学年から教育や学修機会の確保、支援が重要であることが考えられた。

5. 4年生の満足度、成長実感について

1) 満足度

表2に2025年度4年生の1年次(2022年度)～4年次(2025年度)の満足度の推移を示した。「メディアライブラリー」「演習室の設備や器具」などの学修環境については、4年次で満足度が高かったが、「講義教室の設備(空調や照明を含む)」については昨年時より

も低下した。

「学科の教育内容」は満足度が高く推移している。「学科・コースの教員による指導・相談」の満足度は4年次で満足度が上がっており、臨床実習や国家試験の指導の手厚さを反映した結果であると考えられた。

表2 2025年度4年生の満足度の推移

(各項目に対する とても満足／かなり満足／やや満足 の合計、単位：%)

質問項目	1年次 (2022年度)	2年次 (2023年度)	3年次 (2024年度)	4年次 (2025年度)
メディアライブラリー(図書室)の設備や学修環境	92.9	100.0	96.9	96.8
演習室や実習室の設備や器具	92.9	100.0	93.8	90.3
講義教室の設備(空調や照明を含む)	88.1	94.9	90.6	83.9
学生食堂	92.9	97.4	81.3	80.6
所属する学科・コースで学ぶことができる教育内容	90.5	97.4	96.9	93.5
学科・コースの教員による指導・相談	90.5	87.2	81.3	90.3
事務職員によるサポート	95.2	87.2	87.5	93.5
保健室や付属の医療施設	95.2	100.0	100.0	100.0

2) 成長実感

表3に2025年度4年生の1年次(2022年度)～4年次(2025年度)のDP1～DP6に関連づけた「言語聴覚学科において修得が望まれる力の修得実感」の評定値の推移を示した。DP1～4は、1年次から2年次にかけて評定値の下がった項目がみられたが、3～4年次では全ての項目の評定値が上がり、成長実感をともなっていた。知識や臨床技能、研究や発信については、学年が上がるごとに上昇していた。

表3 2025年度4年生「言語聴覚学科において修得が望まれる力」の修得実感の推移

	1年次 2022	2年次 2023	3年次 2024	4年次 2025
DP1 教養、人間愛にあふれた人格	3.4	3.3	3.5	3.9
DP2 コミュニケーション能力、社会性、倫理感	3.5	3.3	3.6	3.9
DP3 社会人として自立(律)する力	3.7	3.3	3.7	4.0
DP4 基礎知識、専門知識	3.4	3.1	3.3	3.7
DP5 臨床技能	2.5	3.0	3.3	3.7
DP6 研究、発信	2.7	3.0	3.2	3.6
平均	3.1	3.2	3.4	3.8

(5:十分付いた、4:かなり付いた、3:少し付いた、2:あまり付いていない、1:全く付いていない)

6. まとめ

言語聴覚学科における教育内容やカリキュラムについては、満足度は学年の進行とともに上昇をみとめた。また、学科において修得が望まれる力については、低学年からコミュニケーション能力等の基本的な能力の修得実感を持ち、言語聴覚領域の専門知識や臨床技能等は、高学年にかけて修得実感を持っている。以上から、カリキュラムに沿った教育内容により、望まれる力をつけられる教育実践がなされている状況であることが示された。一方で、低学年では、授業についていけないと不安を感じている学生が多かった。今後、個々の状況の把握や学科内での共有、必要に応じて学修支援の検討が必要な状況である。

2025年度 健康メディカル学部心理学科

“学修行動と学修成果の調査”の解析

心理学科では全学共通の項目に加え、学生が在学中に修得することが望ましい学修内容について41の学科独自の項目を用いて、学修行動と成果について調査している。これらをもちいて3つのポリシー（アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー）を踏まえた学科の取り組みの点検・評価を試みた。ここでは主に5つのディプロマポリシーを中心に解析した内容について述べる。ディプロマポリシー（DP）とはすなわちDP①社会人として自立するために、主体的に学び、チャレンジし続ける力を有している、DP②幅広い教養と技術を活用し、多角的な視点を持って、問題に計画的に取り組む力を有している、DP③適切なコミュニケーションスキルを持ち、他者とチームを組んで能力を発揮する力を有している、DP④人間を理解する心理学の知識と方法を修得し、それらを社会で応用する力を有している、DP⑤心理に関する支援の学びを通して、責任ある社会人としての倫理的態度を有しているの5つである。なお2026年現在学科のディプロマポリシーはここで述べたものから更新されているが、この解析では調査実施時のディプロマポリシーとして先の5つを用いる。以下昨年度と同様、全学共通の項目についての結果をまとめたのち（下の1から3）、特に卒業年次である4年生の満足度と成長実感（同じく4）、加えて学科のディプロマポリシーに関わる学修効果について評価、点検した（同じく5）。

1. 授業と授業期間中の活動について

“授業の予習や復習”などの項目について、学生は「頻繁にした」、「時々した」、「あまりしなかった」、「全くしなかった」の4つの選択肢から1つを選び回答した。

授業の予習や復習について、1年生は「あまりしなかった」と「全くしなかった」を合わせると38.9%で、普段あまり学修していないという報告が一定数見られる。2年生では予習、復習の頻度が増加する傾向であったものの（2年生では「あまりしなかった」と「全くしなかった」の合計が24.1%に減少した）、「あまりしなかった」と「全くしなかった」を合わせた数値は3、4年生ではそれぞれ35.7%、38.4%であり1年生と大差なかった。予習等を「あまりしなかった」と「全くしなかった」を合わせた割合は全ての学年で大学全体の平均値（22.1%）を上回っており、今後、他の学科等の取り組みを参考にするなどしながら、学生が予習、復習、授業のための勉強を行いやすい環境作りに努めることが望ましいと考えている。

オンライン学修支援システム（manaba）を利用した学修については、「頻繁にした」と「時々した」を合わせると学科全体では81.4%であった。大学全体では「頻繁にした」と「時々した」の合計は77.2%であり、心理学科ではオンライン学習支援システムが学内の水準に近い割合で活用されている。

就職や資格取得に関わる勉強について、1年生は63.9%の学生が「あまりしなかった」あるいは「全くしなかった」と答えている。一方、4年生では「あまりしなかった」あるいは「全くしなかった」と答えた学生は28.3%であり、学年が上がるにつれ改善する傾向が見られた。こうした傾向はフレッシュセミナー、アドバンスセミナー等を通して学科で取り組んでいるライフプラン、キャリアプランへの意識づけが肯定的な効果を生じさせている可能性がある。

授業に関して“友人と一緒に勉強”することを「あまりしなかった」、「全くしなかった」学生の割合は1年生では38.9%であったが、学年が上がるるとともに増加し4年では50.5%であった。大学全体ではこの割合は29.6%であり、現在、心理学科では、学年が上がるにつれ友人と一緒に勉強する学修姿勢は優勢ではないことが示唆される。この姿勢と

関連する可能性があるのは、“学内で過ごす時間（一日あたり）”への回答である。この選択肢について学生は最長「8時間以上」から最短「1時間未満」まで時間が減少していく9つの選択肢から選んで回答した。心理学科では学内で7時間以上過ごしている割合が、学科全体で8.7%であり、これは大学全体の22%の半分以下の低い数値であった。学内にいる程度滞在する学生がより少ないため、“友人と一緒に勉強”する姿勢が優勢でない可能性がある。

授業期間中に、“部活動やサークル活動を行った回数（一週間あたり）”については、「なし」と回答した割合が1年生で81.9%であり、どの学年においても大学全体の値である77.2%より多かった（「なし」と回答した割合が最も低い値は1年生の81.9%であり、最も高い値は3年生の93.9%であった）。つまり心理学科の多数の学生が部活動やサークル活動に関与していないと回答した。

2. 本学の設備や教育内容について

設備や教育内容についての満足度においては（4肢選択）、特に“学科・コースの教員による指導・相談”に対して「とても満足」、「やや満足」という回答の合計は、学科全体では94.5%（大学全体では90.1%），“授業内容”については同様に学科全体では89.2%（大学全体では86.2%），“大学全般”については同様に学科全体では89.8%（大学全体では88.5%）であった。心理学科の比較的多くの学生が本学の設備や教育内容について「やや満足」以上の回答をしていた。なお本学の設備や教育内容についての質問項目は、学年が進むことにより微増する場合があると同時に、学年間での明確な変化は見られない項目も複数あった。これら満足度指標のうち4年生の結果については後述する。

3. 学生生活における不安や悩みについて

学生生活における複数の不安、悩みのそれぞれについて「大いにある」、「少しある」、「あまりない」、「全くない」の4つから学生があてはまるもの1つを回答した。いくつかの項目では4年生において、下の学年に比べて不安、悩みが減少する傾向が見られた。例えば“卒業後にやりたいことがみつからない”点については、「大いにある」あるいは「少しある」という割合が1年生では56.9%であるが、4年生では23.2%と減少し、同じく「学内の友人関係に悩みがある」点については同様の値が1年生では16.7%であるが4年生では8.1%に減少した。同様に“希望の就職先や進学先へ行けるか不安だ”という点についても、同様の値は1年生で69.4%、4年生では18.2%と大幅な減少が見られ、おそらく就職活動の進展によりこれらの不安、悩みが解消される傾向があることがうかがえる。

“身体面”と“精神面”への健康に不安があるという項目については、「大いにある」と「少しある」を合わせた割合が、身体面では学科全体で32.8%、精神面では同様に33.4%であり、これらは大学全体に比べて高い割合であった（大学全体では身体面では同様の値が18.4%、精神面では19.7%）。これらの値は1年生から最終学年まで変化なく横ばいの傾向であり、学年が進む中で見られる一定の退学者の中に心身への不調への不安を持つものが含まれるであろうことを考慮すると、少なくとも在学期間中に健康不安への傾向に改善が生じないことが示唆される。

学内の友人関係などの悩みについて「誰に相談しましたか」という設問では、学生は友人、家族、教職員、その他等から最大2つを選び回答した。心理学科の学生について「相談する相手がいない」と回答した者の割合は1年生で18.8%、それ以降の学年では5%未満で推移しており、上級生は1年生に比べると相対的に相談する相手に悩んでいないことが示唆される。1年生に対して相談相手を得やすい環境作りを意識することが実りある学生生活に有効かもしれない。

その他、「授業の内容についていけない」点については、1年生では66.7%の学生が不安、悩みが「あまりない」あるいは「全くない」と回答したが、3年生ではこの値は79.6%、4年生では92.9%と上昇し、不安を持つ学生が減少していくことが示された。学習

過程の進展を反映している可能性がある。

4. 4年生の満足度と成長実感について

特に最終学年である4年生の満足度と成長実感について分析した。

満足度については、一部の項目について下位の学年よりも満足度が高いことが示された。例えば“学生生活”への満足度は、「やや満足」、「とても満足」を合わせた割合は1年生では81.9%、2年生では72.2%、3年生では84.7%、4年生では91.9%となり、4年生で最高値に達している。同様の傾向は“大学全般を総合的に判断して”いる場合にも見られ1年から4年までそれぞれ87.5%、83.3%、90.8%、93.9%と同様に4年生で最高値を示した。これらは在学期間が長いほどこれらの点に満足する傾向を示している。

成長実感については、学生の自己評価による成長度合いを用いて分析した。例年と同様、4年生の成長実感は下位の学年と比べ高い傾向があった。例えば4年生では“心理学に関する基礎知識”が「十分付いた」あるいは「かなり付いた」と回答した学生の割合は回答者の58.6%をしめたが、1年ではこの値は36.1%であった。他にも“心理療法に関する知識”では1年次の31.9%が、4年次に49.5%に、同じく“主体的に行動する力”については29.2%が64.6%に上昇するなど、全体として4年生の自己評価にみられる成長の実感はより高い傾向があった。全体的な傾向については次項と図も参考になる。

5. 学修行動と学修成果の調査とディプロマポリシー（DP）

心理学科独自の41個の設問を用いて冒頭に記したディプロマポリシーごとの達成度を評価した（ディプロマポリシーは調査時のもの）。学生は主に、“大学入学時と比べて、以下に挙げる「能力」は身に付きましたか。”という共通の設問のもと、“幅広い知識と教養”などの41項目に対して回答した。この際学生は「十分付いた」、「かなり付いた」、「少し付いた」、「あまり付いていない」、「全く付いていない / 該当しない」の5つの選択肢から1つを回答した。全体的には全てのディプロマポリシーについて学年がすすむとともに、身に付いたという自己評価が高くなる傾向が見られると同時に、4年生後期の時点でディプロマポリシーに関する能力が「十分付いた」あるいは「かなり付いた」と答えた学生の割合が60%前後であることが示された（50%から66%の範囲）。

DP①社会人として自立するために、主体的に学び、チャレンジし続ける力を有している
“主体的に行動する力”など、このディプロマポリシーに関わる全項目を合わせると、能力が「十分付いた」あるいは「かなり付いた」と回答した学生の割合は、1,2年では40.9%であったが、3,4年では63.4%であった。

DP②幅広い教養と技術を活用し、多角的な視点を持って、問題に計画的に取り組む力を有している

“幅広い知識と教養”など、このディプロマポリシーに関わる全項目を合わせると、能力が「十分付いた」あるいは「かなり付いた」と回答した学生の割合は、1,2年では41.4%であったが、3,4年では62.4%であった。

DP③適切なコミュニケーションスキルを持ち、他者とチームを組んで能力を発揮する力を有している

“他の人と協働しながら物事を進める力”など、このディプロマポリシーに関わる全項目を合わせると、能力が「十分付いた」あるいは「かなり付いた」と回答した学生の割合は、1,2年では45.7%であったが、3,4年では66.1%であった。

DP④人間を理解する心理学の知識と方法を修得し、それらを社会で応用する力を有している

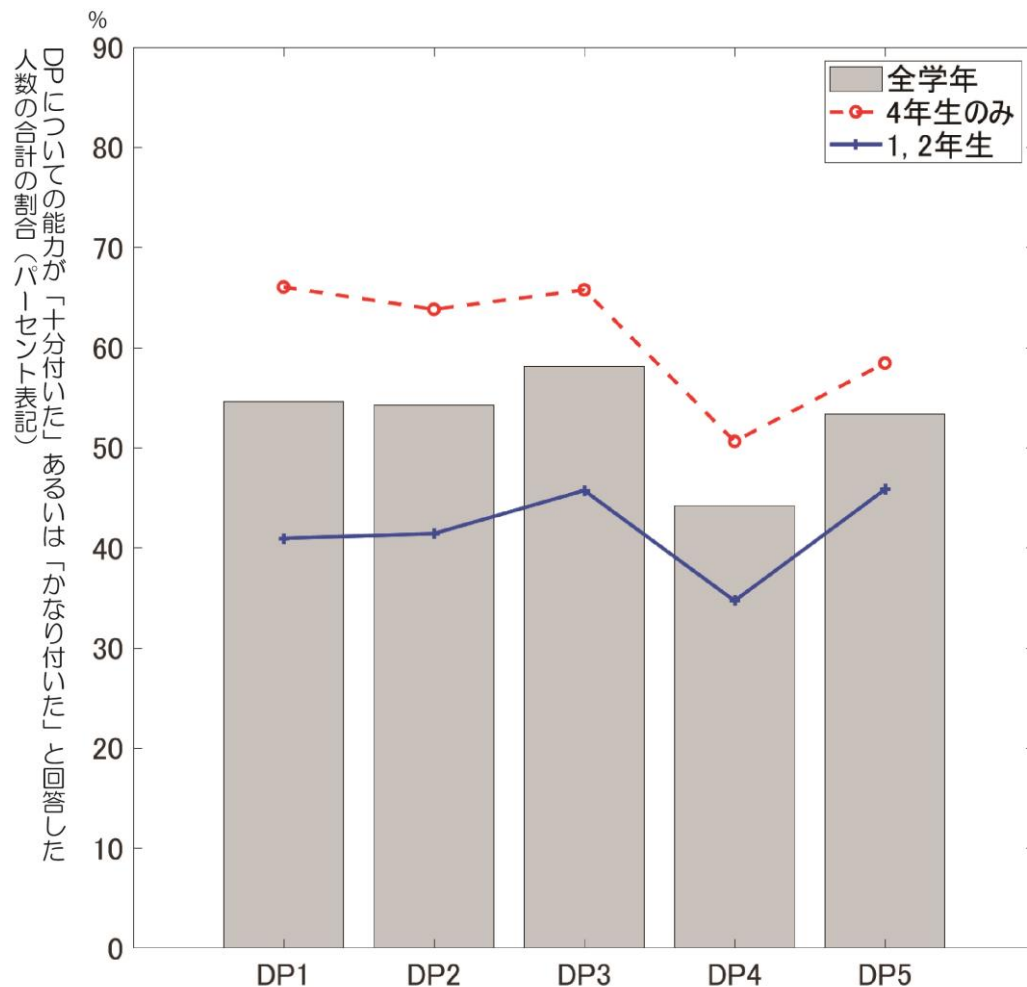


図 DP（調査時）についての能力が、「十分付いた」あるいは「かなり付いた」と自己評価した学生の数（2つの合計）が全体の人数に占める割合（パーセント）。卒業前の時点で概ね6割であることがわかる。

“心理学に関する基礎知識”など、このディプロマポリシーに関わる全項目を合わせると、能力が「十分付いた」あるいは「かなり付いた」と回答した学生の割合は、1, 2年では34.7%であったが、3, 4年では50.4%であった。

DP⑤心理に関する支援の学びを通して、責任ある社会人としての倫理的態度を有している“対人援助職になるための総合力”など、このディプロマポリシーに関わる全項目を合わせると、能力が「十分付いた」あるいは「かなり付いた」と回答した学生の割合は、1, 2年では45.8%であったが、3, 4年では58.2%であった。

ディプロマポリシーに関する分析からは、学年が進むとともにディプロマポリシーに沿った学修が進展していることを読み取ることができる。同時に、自分に身に付いたと自己評価する学生の割合は卒業前の時点でも全体の3分の2（66%）を大きく超えることはなく、これは昨年度も同程度の値であった。今後特にDP4の改善に向けて問題解決型の授業を導

入するなど教育内容の見直しを進めること，PDCA サイクルを具体化していくこと，さらにアドミッションポリシー，カリキュラムポリシー，ディプロマポリシーの適切性自体を評価し続けていくこと，加えて卒業生が就職した組織・企業からの卒業生の評価など学修成果等についてのなんらかの客観的な指標を併用することが望ましいかもしれない。

2025年度 健康メディカル学部健康栄養学科

学修行動と学修成果の調査アンケート結果について

健康メディカル学部健康栄養学科では、3ポリシー^注（AP：アドミッションポリシー、DP：ディプロマポリシー、CP：カリキュラムポリシー）を基盤とし、高度な知識と技能、豊かな人間性を兼ね備えた管理栄養士の養成を重要な使命としている。本学科では、学生の学修成果の可視化と分析により、DPに掲げる学修成果の点検と評価、現行教育課程とCPの達成度の検証を目的として学修行動と学修成果の調査アンケートを実施した。

【調査の概要】

- 調査対象 ・ ・ ・ 健康栄養学科に在籍する1～4年次の学生（275名）
- 調査期間 ・ ・ ・ 2025年11月17日～12月14日
- 調査方法 ・ ・ ・ UNIPAを用いたWEBアンケート（選択式）
- 調査内容 ・ ・ ・ 全87問（全学共通設問50問、学科独自設問37問）
- 回答数 ・ ・ ・ 255人
- 回収率 ・ ・ ・ 92.7%

【結果】

1. 授業・学修について（全学共通）

学年進行に伴う学修に対する取り組み姿勢の向上は、微増にとどまった。特に、授業の予習や復習、課題のための勉強、就職や資格に関わる勉強について、「頻繁、またはかなりした」と回答した学生は4年次で46%（同学生の前年度3年次で39%）、3年次で21%（同学生の前年度2年次で28%）、2年次で12%（同学生の前年度1年次で26%）となり、授業を中心とした学修への取り組みに課題を残す結果となった。一方、就職や資格取得に係る勉強を「頻繁、またはかなりした」と回答した学生は4年次で63%となり、同学生の3年次（38%）から大幅な向上が見られた。この結果は、学生個人が国家試験の難易度と資格の取得、4年次必修科目の重要性をこれまで以上に強く意識し、勉強に取り組んだ結果と考えられる。

2. 不安や悩みについて（全学共通）

身体面、精神面の健康状態に対する不安については、多くの学生は「全くない、またはあまりない」と回答しているが、一部の学年においては約30%の学生が精神面の健康状態への不安を「少し、または大いにある」と回答している。学年別セミナー、オフィスアワー等を活用し、学生生活に関わる不安要素の発見、軽減に努めていきたい。

3. 教養、コミュニケーション力の修得状況について（学科DP1、DP2）

DP1（幅広い教養を身につけ、自立（律）できる力を有している）に該当する設問（51-57）に関しては、概ね学年進行に伴い身についた、特に「かなり、または十分ついた」と回答する学生が増加している。しかし、複数の項目で、3年次で「かなり、または十分ついた」と回答する学生の割合が2年次より低下している。臨地実習や就活の準備などを通じて社会と接することによる自信の無さ、または自己評価を厳しくする様子が見られた。4年次になると、臨地

実習や就職活動、国家試験に向けた学修などを経験したことにより修得状況の向上に寄与したと考えられる。

DP2（コミュニケーション力を活かし、他者と協働する力を有している）に対応する設問（58-62）に関しては、設問58-60では2～4年次全てで50%以上が「かなり、または十分ついた」と回答していた。セミナーでの学外実習や臨地実習の実施、就職活動等の機会が修得状況の向上に関わるものと考えられる。ただし、いずれも3年次に「かなり、または十分ついた」と回答する学生が2年次より少なくなっている。臨地実習が未経験あるいは一部施設のみ実施という段階であり、自分たちの課題が見えてきている様子がみられた。現場スタッフと協働する能力（設問61）、他職種と連携（情報提供・収集）する力（設問62）に関しては、4年次で身についたと回答する学生が大幅に向上した。3年次の多職種連携論の履修や臨地実習において、様々な職種と接する機会があることが要因の一つと考えられる。

4. 専門基礎分野の知識と技能の修得状況について（学科DP3）

DP3（食・栄養学における専門分野で社会に貢献できる力を有している）に対応する設問（63-70）では、調理・加工に関する基本的知識と技術（設問67）、食・健康・栄養学への興味と関心（設問70）で、1-2年次での修得状況が高く、特に2年次で「かなり、または十分ついた」と回答した学生が3年次よりも多い結果となった。調理・食・健康への興味と関心が高い高校生が健康栄養学科に入学するケースが多いことや、1年次で基礎調理学実習があり、基本的な調理の知識と技術が増したことが原因と考えられる。その他の多くの設問は学年進行に伴い増加がみられた。これらの質問は、対象となる科目が限定されていることから、修得状況が科目の配当年次と相関する可能性が見られる。4年次で身についたと回答する学生が大幅に向上したのは、国家試験に向けた学修の成果であると考えられる。

5. 専門知識と技能の修得について（学科DP4）

DP4（管理栄養士に必要な高度専門職としての資質・使命感を修得し、社会で活躍できる能力を有している）に関する設問（71-78）。ほとんどの設問で、「かなり、または十分ついた」と回答する学生は1年次では低く、学年進行に伴い増加した。専門科目や総合演習などの演習科目での学修、臨地実習等での経験が、必要とされる知識と技能の修得向上に繋がったと考えられる。

6. 専門家を目指す学生としての態度の修得について（学科DP4）

管理栄養士として社会で貢献するには、知識・技術に加えクライアントの人権の尊重、守秘義務など社会観念も必要である。管理栄養士になる使命感・責任感・倫理観（設問79）が少しでも身についたと回答したのは、1年生では80%未満であるが、2年生以上はほぼ100%に近づいている。学年が上がると専門性の高い科目の学修が増え、管理栄養士の社会での役割や責任の理解がより深くなっていると推察される。守秘義務の理解と秘密を守る態度（設問80）、クライアントの人権を尊重する態度（設問81）はすでに2年生で90%を超えている。専門科目やセミナー、臨地実習において人を対象とする専門家としての態度の教育がこのような結果に結びついていると考えられる。

7. 現場での実践力（臨床力）の修得について（学科DP3、DP4）

管理栄養士になる使命感・責任感・倫理観（設問79）、現場の状況に応じた行動力（設問82）、食・健康・栄養学の専門家としての総合力（設問83）は学年が上がることについて身につけ、4年生では90%以上が身についたと回答している。学内での実習や学外の臨地実習、横断的学修を目的とする総合演習が管理栄養士としての総合的応用力や実践力を養う要因の1つと考えられる。

8. 研究への興味・関心について（学科 DP5）

問題提起、問題解決能力は学年が上がるにつれ着実に割合が高くなっている（設問 84、85）。食・健康・栄養学に関する研究を行う意義は低学年では身についた割合が少ないが、4 年生ではほぼ 100%である。3 年生後期から卒業研究への興味が沸き、専門性の高い学修から研究への興味が高くなると推測される。研究の意義の理解の深まりと相関して研究倫理への理解も高まり、4 年生ではほぼ 100%が研究倫理が身についている。研究の意義や研究倫理が少しでも身についた学生がほぼ 100%であったことは、学生の探求心の向上の現れと考えられる。

【まとめ】

例年通り多くの設問において 4 年次では高い修得状況が見られた。中でも、食・健康・栄養学の専門家としての総合力（設問 83）、について「十分、またはかなり付いた」と回答した学生は 3 年次の段階では 45%程度であったが、4 年次では 80%の学生が「十分、またはかなり付いた」と回答しており、学生自身は 4 年間で学修面での大きな成長を実感しているものと考えられる。また、人の意見に耳を傾け共感する態度（設問 60）についても 4 年次では 80%超の学生が「十分、またはかなり付いた」と回答していることから、人としての成長も実感しているものと思われる。

本調査による学生の学修行動・学修成果の検証と可視化により、本学科の教育方針や教育課程の効果を客観的に評価し、更なる進展を目指したい。

注) https://www.thu.ac.jp/aboutus/disclosure/policy/health_medical 参照

2025 年度 健康メディカル学部医療科学科救急救命士コース 学修行動と学修成果の調査アンケート結果について

救急救命士コースではディプロマポリシー (DP) として①救急救命士としての倫理観に基づき行動できる能力を有している。②病院前救急医療に関連する他職種と協調して活動できる能力を身につけている。③救急救命士となるために必要な知識と技能を身につけている。④救急救命士としての知識と技術を基に、傷病者に適切な医療の補助を行う能力を有している。⑤継続的研鑽・学修に励み、専門的知識と技術水準を維持し、病院前救急医療の発展に寄与することのできる能力を身につけている。の5項目を掲げ、幅広い教養と高度な専門知識を有した、病院前救急医療における医療専門職である救急救命士の養成を目指している。

本調査を踏まえ、全学共通の項目と、DP に基づく調査結果を分析し報告する。

I 学修行動と学生生活について

1 本学の「目標とする力」の修得度(設問1～6)について

設問1「人間愛(利他の心)」、設問2「他者と協働する力」、設問5「専門性と高める意欲と力」において極めて高い自己評価を得ており、コースの教育目標は概ね達成されている。

設問6「わが国と世界の持続・発展に尽くす力」のスコアが相対的に低いため、専門教育と教養教育のバランスを考慮する必要がある。

4年生は、すべての設問において「十分身に付いた」という強い肯定の割合が全学年の中で最も高い、あるいはトップクラス。4年間のカリキュラムに対する高い納得感と、明確な自己成長の実感が読み取れる。また、設問4「創造的な問題解決能力」と設問5「専門性と高める意欲と力」において、4年生での伸びが著しく、総じて本コースの4年間の教育に対する満足度は非常に高いと考察する。

2 授業関連、自主学修項目(設問7～18)

全体の傾向として、「高学年になるほど能動的な学修態度(教員への質問、友人との協働学修、図書館利用)や将来への備え(就職・資格勉強)が強化される」という、非常に健全な成長プロセスが見て取れる。

1日あたりの設問14「学習時間」を見ると、1、2年生では「1時間未満」と「1～2時間」で約7割を占めるが、4年生になると「3時間以上」学習する学生が約半分(48.6%)に達する。全学年合計は大学全体と比較しても予習・復習の実施率や時間は、大学全体の平均値とほぼ同水準である。

設問9「教員への質問・要望」では、1年生では「頻繁にした」「時々した」を合わせても30.8%に留まり、約7割が受動的(あまりしなかった／全くしなかった)である。しかし、4年生ではアクティブな学生が67.0%まで跳ね上がる。就職や国家試験対策で、教員との距離が縮まっていると推測する。

設問10「就職・資格取得に関わる勉強」では、1、2年生の段階でも約6割後半が「頻繁にした」「時々した」と回答しているが、3年生になると「頻繁にした」が 36.7%へ急増。さらに4年生では 67.0%が「頻繁にした」と回答している。3年次の臨床実習や救急自動車同乗実習、4年生の本格的な就職活動・資格試験に向けて、明確な目的意識を持ってスイッチが切り替わっている様子が窺える。

設問11「友人と一緒に勉強した」では、「頻繁にした」「時々した」の割合は、1年(70.1%)から4年(85.2%)へと上昇する。特に4年生の「頻繁にした(43.5%)」は、大学全体平均(27.7%)を大きく上回っており、孤立せず、周囲と切磋琢磨しながら課題や試験を乗り越える文化が定着している。

3 授業欠席回数および課外活動(設問19～22)

設問19「授業欠席回数」を見ると、1年生で「欠席なし」はわずか 5.6% に留まっていますが、2年生(21.8%)、3年生(28.4%)、4年生(27.8%)と学年が上がるにつれて「欠席なし」の割合が大きく増加。また、「5回以上」の重度な欠席者割合は、救命士コース(1.4%)が大学全体(2.9%)の半分以下に抑えられており、深刻な不登校傾向にある学生は少ないと言える。しかし、1年生の「欠席なし」の割合が極端に低い(5.6%)ため、上級生ガイダンスにおいて、自己管理や体調管理に関する更なる意識づけが必要と考える。

設問20「部活動やサークル活動」は、学生の8割以上が課外活動に参加していない現状がありますが、これは「学業やアルバイトへの集中」によるものであると思われる。

4 大学の設備関係(設問23～35)

大学全体と比較して高い満足度(「とても満足」+「やや満足」)を維持している項目が多く、教育の質や教職員によるサポートが高く評価されている。

満足度が非常に高く、特に大学全体の平均を大きく上回っている項目として、①設問32「学科・コースの教員による指導・相談」では、特に4年生の「とても満足」が 49.6%と半数近くに達しており、就職や国家試験対策におけるきめ細かなサポートが実を結んでいる。②設問27「演習室や実習室の設備や器具」で、「とても満足」の割合が 42.2%と非常に高く、大学全体の 33.5%を大きく引き離している。救急実習室や資器材の充実度が救命士コースの大きな強みと言えると思われる。

5 不安や悩みに関して(設問36～43)

設問38「希望の就職先や進学先へ行けるか不安」では、「少しある」「大いにある」を合わせた不安層が 52.6%に達し、半数以上の学生がプレッシャーを感じています。これは大学全体の 52.5%とほぼ同水準であり、全学共通の大きな課題と思われる。

設問40「学内の友人関係」、設問41「家族との関係」、設問42「身体面の健康状態」、設問43「精神面の健康状態」のいずれの項目においても、対象グループは大学全体に比べて

「全くない」「あまりない」と答えた割合が高く、プライベートや健康面での深刻な悩みは比較的少ない傾向にあり、人間関係や心身の健康状態は良好であると考察する。

学年ごとの分析結果をまとめると、①1年生:環境変化への戸惑いと進路への漠然とした不安、②2年生:学業プレッシャーのピークと過渡期、③3年生:進路不安のピーク(ターニングポイント)、④4年生:進路決定による解放と落ち着きなど、学年の進行に伴い、学生の悩みの質が「学業」から「進路」へと明確にシフトしていることが分かります。

設問44「相談相手に関する分析」では、相談相手のトップ3は、「学内の友人(27.1%)」「学外の友人(25.3%)」「家族(25.0%)」であり、身近な人間関係が大きな支えとなっている。また4年生では「学内の友人」が35.6%と、他学年に比べて10ポイント近く跳ね上がっている。卒業や進路(就職活動)という共通の大きな課題に直面し、同じ環境にいる仲間同士で支え合っている構図が見て取れる。

反面、「大学の教職員」への相談割合は2.5%(大学全体は2.9%)と非常に低い水準に留まっています。4年生でわずかに上昇(4.4%)するものの、教職員が「悩みの相談先」として十分に機能している、あるいは気軽に頼れる存在になっているとはいえない現状も見受けられる。

6 デジタルツールの活用(設問44～49)

設問45・46「生成 AI の利用実態」では、「頻繁に利用」「時々利用」を合わせた利用意向は、合計で60.0%、大学全体では70.6%を下回るが、1年生だけは「頻繁に利用」「時々利用」が76.7%と非常に高く、若い世代ほど生成 AI が日常化している。学年で主な利用用途は異なり、1年生は「情報の収集(38.3%)」「授業課題やレポートの作成(34.6%)」が中心、2～3年生は「情報の収集(40%以上)」の割合がさらに高まる。4年生は「就職活動(20.9%)」での利用が急増。自己分析やエントリーシートの添削等に活用されていると推測できる。

設問49・50「オープンバッジの認知度と活用」で、オープンバッジを「知らない」と答えた学生が救命士コース全体で85.0%にのぼる。設問50「就職活動への活用意向」でも、「オープンバッジを知らない」という回答が7割を超えており、制度自体が学生にまだ十分に認知されていない。

II 学修成果について

1 救急救命士としての倫理観に基づき行動できる能力を有している(DP1:設問51～59)

全体を通じて、学生の多くが大学生活の中で何らかの能力向上を実感しています。特に肯定的回答(「十分付いた」「かなり付いた」)の割合に着目すると、設問によって成長の実感度に大きな格差があることが分かった。

最も成長を実感している能力として設問54～59「使命感・責任感、守秘義務の理解、生命の尊重、人権の尊重、思いやりの心、規則や約束の遵守」では、全体の80%以上が「十分付いた」「かなり付いた」と回答しています。また、学年が上がるにつれて「十分付いた」と答える割合が顕著に増加しており、4年生の時点で約6割が「十分付いた」と回答している。4年間

を通じた教育・学生生活の効果がはっきりと現れている。現在の教育カリキュラムや取り組み等が非常に有効に機能している証拠であり、救急救命士としての倫理観に関して非常に高い達成感を得られている能力で、救命士コースの強みと言える。

また、堅実に成長を実感している能力として設問51「幅広い知識と教養」、設問52「問題を見つけて解決する力」では、学年が上がるにつれて「十分付いた」の割合が綺麗に上昇している。

設問51(肯定的回答:68.1%)では、1年時は「十分付いた」が 19.6%ですが、4年時には 47.8%まで上昇、低学年では「少し付いた」に留まっていた学生が、高学年になるにつれて確固たる自信に変えている様子が伺える。

設問52(肯定的回答:65.7%)では、設問 51と同様の推移をたどっており、4年生では 46.1%が「十分付いた」と回答している。

設問53「英語力に関する力」は、他の設問と全く異なる動きを見せており、今回の調査で最も注視すべき項目である。

2 病院前救急医療に関連する他職種と協調して活動できる能力を身につけている

(DP2:設問60～65)

すべての設問において、1 年生から 4 年生にかけて「十分付いた」「かなり付いた」の肯定的な回答の割合が右肩上がりに増加し、学年進行に伴う成長を実感できる。特に設問62「人とコミュニケーションする力」、設問63「他の人との協働力」において、4年生の肯定的な回答「十分付いた」「かなり付いた」が8割を超え、特に設問65「他の救急救命士コースの学生との協働力」は、どの学年でも約4割が最高評価である「十分付いた」と回答しており、4年生では 53.9%に達し、対人関係やチームワークに関する能力は、コースの教育プログラム(実習や演習など)が極めて高い水準で機能していると言える。

また、設問64「人の意見に耳を傾け共感する態度」では、否定的な意見はわずか6.1%に留まり、大半の学生が他者への理解や共感する態度を身に付けて卒業していくことが伺える。病院前救急医療に携わる人材としてのマインドセットが順調に育まれている。

一方で、設問60「文章(レポート)を書く力」は、全体で「少し付いた」が 41.5%と最も多く、1～3年生まではこの傾向が続きます。学年別の変化で1～3年生までは肯定的回答が 3 割前後で推移していますが、4年生になると一気に 70.5%へと跳ね上がっています。これは卒業を前にして、この設問に対する意識が大きく変化する性質の項目であると言えます。

3 救急救命士となるために必要な知識と技能を身につけている。(DP3:設問66～77)

全体的に極めて高い評価を得ている項目は設問70「心肺蘇生に関する知識及び技術」では全体で「十分付いた」の割合が 40.8%と最も高く、「かなり付いた」とあわせた合計が 78.7%に達している。1～3年時点でも約 75%以上の高い水準を維持していますが、4年生になると「十分付いた」が 49.6% と、約半数に達している。

次に設問76「救急救命士の役割に対する知識と理解」では、「十分付いた」「かなり付いた」の合計が 73.4%と高く、学年別に見ると1年生(76.6%)で高く、2年生(61.8%)で一度下がった後、4年生で 83.5% と爆発的に上昇している。

学年進行による「成長・意識向上」が顕著な項目として、多くの設問で、1・2年生のうちは「少し付いた」に回答が分散し、3・4年生、特に 4 年生で肯定的な回答が急増するという「右肩上がり」の V 字・成長曲線を描いている。

設問66「人体の構造や機能に関する基本的知識」は、「十分付いた」「かなり付いた」が1年生 56.1% ⇒ 4年生で 78.3%、2年生で「少し付いた」が 44.5% と1年生より増えますが、4年生では肯定派が約8割まで急増。

設問72「医療制度・社会保障に関する基礎知識」は、「十分付いた」「かなり付いた」が1年生 60.8% ⇒ 4年生で 75.7%、2年生の肯定的回答は 42.8% と全学年で最も低く、課題が見られる時期ですが、4年生で一気に挽回している。

設問73「傷病者の緊急度・重症度を判断できる知識」は、「十分付いた」「かなり付いた」が1年生で 61.7% ⇒ 4 年で 78.3%、4年生の「十分付いた」が 48.7% と非常に高くなっている。

設問75「救急救命士が実施可能な手技に関する知識」でも「十分付いた」「かなり付いた」が 1 年で 68.3% ⇒ 4 年で 79.1%、と 4 年生の「十分付いた」が 50.4% と、半数を超えている。

逆に、最も慎重な評価だった項目は設問69「中毒に関する基礎知識」は、全体で「十分付いた」が 26.5% と最も低く、否定的な意見(「あまり付いていない、全く付いていない」)の合計も 8.4% と、他設問に比べてやや高めである。

学年が進むにつれて学生の満足度や意識が明確に向上していくプロセスを証明している。4年生の数字の高さは、これまでの取り組みやカリキュラムが最終的に実を結んでいることを示していると考察できる。

4 救急救命士としての知識と技術を基に、傷病者に適切な医療の補助を行う能力を有している(DP4:設問78～81)

学年進行で分析したところ、すべての設問に共通する極めて顕著な傾向(学生の意識の変容プロセス)が浮かび上がった。

「2年生の壁(中だるみ・不安のピーク)」の存在として、1年生時点では比較的高かった肯定的回答「十分付いた」「かなり付いた」の合計が、2年生になるとすべての設問で大きく低下している。

設問78「傷病者の緊急度・重症度を判断できる能力」では、「十分付いた」「かなり付いた」が1年で 61.7%→ 2年で 50.0%に低下「少し付いた」が 43.6%へ急増している。

設問79「臨床実習の場で適切な判断・処置など対応できる能力」は1年が 50.4%→ 2年で 41.0%に低下、「あまり付いていない」「全く付いていない」の否定的回答が 19.1%へ増加。

設問80「臨床実習の場で記録・報告、スタッフと協働できる能力」は1年が 48.6%→ 2年で 38.1%に低下、「あまり付いていない」「全く付いていない」の否定的回答が 24.6%と全体の 1/4

に達している。

大学生活への慣れによるモチベーションの低下(中だるみ)、または2年生で専門科目の難化と将来への不透明感から、この時期が最も迷いや不満を抱えやすい時期であることがデータに反映されたものと考察する。

しかし、2、3年生以降の「劇的な V 字回復」と4年生の極めて高い満足度も確認され、2年生で否定的だった数値は、3年生になると急激に上昇し、4年生で最高値に達しています。

設問80「臨床実習の場で記録・報告、スタッフと協働できる能力」では、2年生の「十分付いた」「かなり付いた」の肯定的回答 38.1%から、3年生では 74.3%へと約36ポイントも急増している。

4年生になると、すべての設問で「十分付いた」「かなり付いた」の肯定的評価が 73.9%～80.9%に達し、特に「十分付いた」の割合が半数近く(42.6%～48.7%)を占めるようになっていく。

この結果は、3年生時の「臨床実習」「救急用自動車同乗実習」で実際の現場を体験したこと、就職活動の準備期間などを経て、学生自身の目的意識が明確になり、教育や環境に対する納得度・満足度が最終的に非常に高い状態に仕上がってきたことが示されていると考察する。

5 継続的研鑽・学修に励み、専門的知識と技術水準を維持し、病院前救急医療の発展に寄与することのできる能力を身につけている(DP5:設問82～87)

学年が上がるほど評価が高まる傾向である。ほぼすべての設問において、1、2年生よりも3、4年生、特に4年生の「十分付いた」の割合(40%～50%超が「十分付いた」に集中)が突出して高いという共通した特徴がみられる。

最も評価が高いのは、設問87「専門的知識と技術水準を維持しようとする意思」で、「十分付いた」「かなり付いた」が 69.8%に達し、全体の中で最もポジティブな受け止め方をされている。

最も課題が見られるのが、設問85「研究倫理への理解」で「十分付いた」「かなり付いた」が 52.8% に留まり、「少し付いた」が 35.1%、「あまり付いていない」「全く付いていない」の否定的な回答が 12.0% と、他の設問に比べて明らかに評価が低い。

DP5においてもDP4と同様に、多くの設問(特に設問82「物事を分析的・批判的にみる力」、設問83「救急医療研究への継続的な興味と感心」、設問84「救急医療を研究する意義の理解」、設問86「自分のキャリアについて考える力」)において、1年生よりも2年生の方が肯定的回答が下がり、「少し付いた」が増加するという「中だるみ」や「不安」の傾向が見られる。大学生活やカリキュラムに慣れた一方で、将来への不安や中だるみが生じやすい時期である可能性がある。

4年生のデータはどの設問も非常に優秀であり、最終的な到達度や満足度は高いと言える。現在のカリキュラムや指導の方向性は間違っていないため、1、2年生の満足度をいかに底

上げし、4年生のレベルまでスムーズに引き上げる必要がある。

Ⅲ まとめ

1 全学共通項目

- ① 救命士コースの強みは、高い目的意識と、実践的な能力の定着である。救急救命士という明確な専門職を目指すコースであるため、大学全体と比較して「専門性」や「協働力」への自己評価が非常に高いのが最大の特徴です。
- ② 学修行動では、学年が上がるにつれて国家試験対策や就職対策が加速している。日頃の勉強スタイルや時間の使い方にも、医療系専門コース特有の傾向が強く表れている。
- ③ 課題と懸念点として、3年生の「進路への大いなる不安」と、全学的なオープンバッジの認知不足があげられる。「希望の就職先へ行けるか不安だ」に対し、「大いにある」と答えた割合が3年生で 28.4% と突出し、4年生(8.7%)になると一気に解消している。調査期間の影響も考えられるが、公務員採用試験や国家試験のプレッシャーがピークに達する3年生の後半(あるいは4年生への進級前後)に、キャリア支援や教員による精神的なフォローを重点化することが効果的であると考え。オープンバッジの認知不足についてもガイダンス等での積極的な周知、あるいは「救急救命士コース内でも成果がバッジになる」といった具体的なインセンティブ設計が求められる。

2 救命士コースの DP に基づく調査結果

① 学年の進行に伴う成長実感の確実な向上

ほぼすべての設問において、学年が上がるにつれて「十分付いた」と回答する割合が有意に増加している。特に4年生時点では、多くの能力において「十分付いた」が単独で最大のボリュームゾーン(40%~60%以上)を占めており、4年間の大学教育やキャンパスライフを通じて、学生が自身の確かな成長を実感していることが窺える。

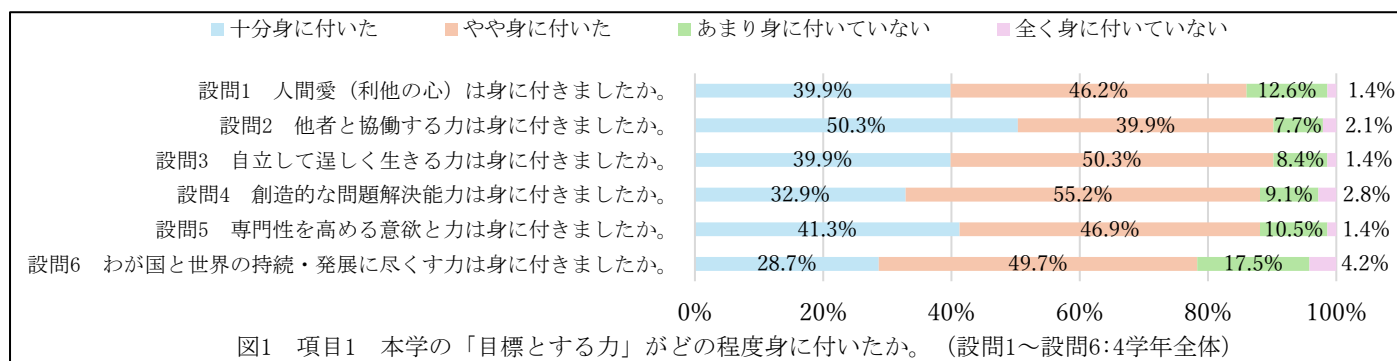
② 教育効果に対する高い肯定的な評価

「あまり付いてない」「全く付いていない／該当しない」といった否定的な回答の割合は、全体計で見ると多くの設問で 10%未満に留まっている。学生の大部分が、何らかの形で能力の伸長を実感している(「少し付いた」以上)という結果であり、全体として提供されている教育プログラムや学修環境が肯定的に受け止められていると評価できる。

学修行動と学修成果の調査アンケートの解析

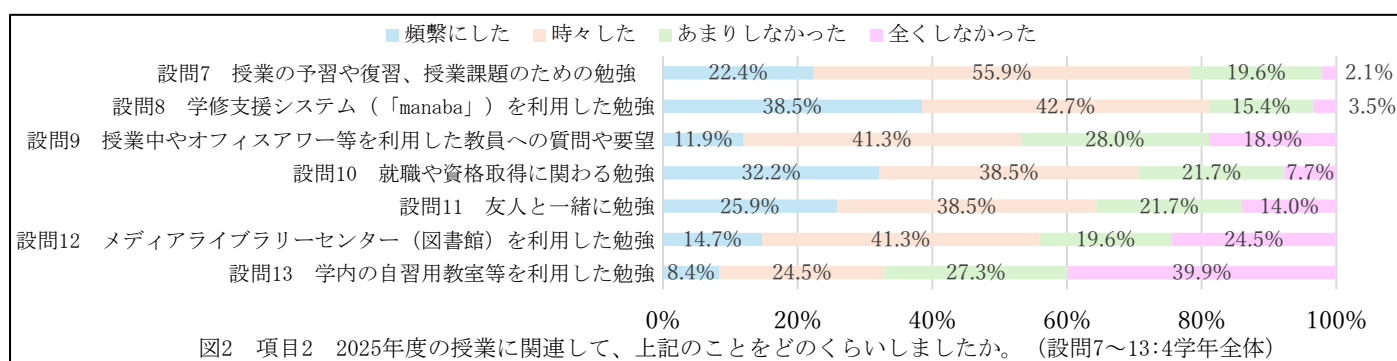
臨床工学コースでは、①生体理解の為の医学的知識と、工学的知識の修得、②医療分野における医療機器を紹介し、医療技術を支援するための電気・電子工学的知識の修得、③医療において必要不可欠な医療機器が有するリスクを十分に理解し医療安全の構築に寄与する能力、④医療チームの一員として、他職種の役割を理解し円滑に連携する能力、これらを身に付けることができる教育を実施している。このような視点に沿って設問に関して分析を行った。

項目1「本学の『目標とする力』がどの程度身に付いたか教えてください。（設問1～設問6:4学年全体）」



臨床工学コース全体では、「目標とする力」の各設問で、「十分身に付いた」「やや身に付いた」と回答した肯定的評価が8割前後と高く、教育目標は概ね達成されている。協働力（設問2）は特に肯定回答が多く、チーム医療を前提とした教育の成果が反映されている。更に学年が上がるにつれて、人間愛や問題解決力が身に付いたと考える割合が増える傾向があるため、大学での学びや経験が利他の心の醸成や問題解決能力に寄与している可能性がある。

項目2「2025年度の授業に関連して、以下のことをどのくらいしましたか。（設問7～設問13:4学年全体）」

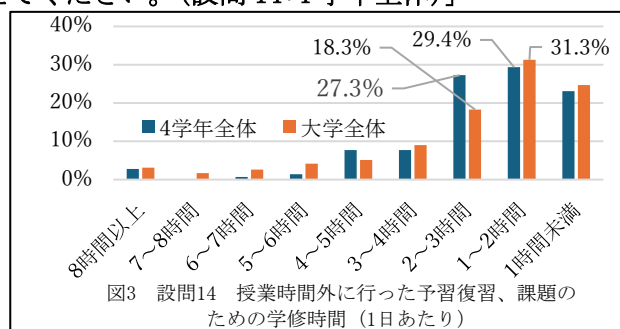


本調査結果の設問7から、授業の予習・復習や課題のための勉強時間については、「頻繁にした:22.4%」、「時々した:55.9%」となっており、学年別にみると勉強時間は高学年ほど多くなる傾向にあった。設問8では、頻繁にした:38.5%、「時々した:42.7%」の合計81.2%とデジタルツールを活用した個人の学修に高い成果を実感していることが判明した。

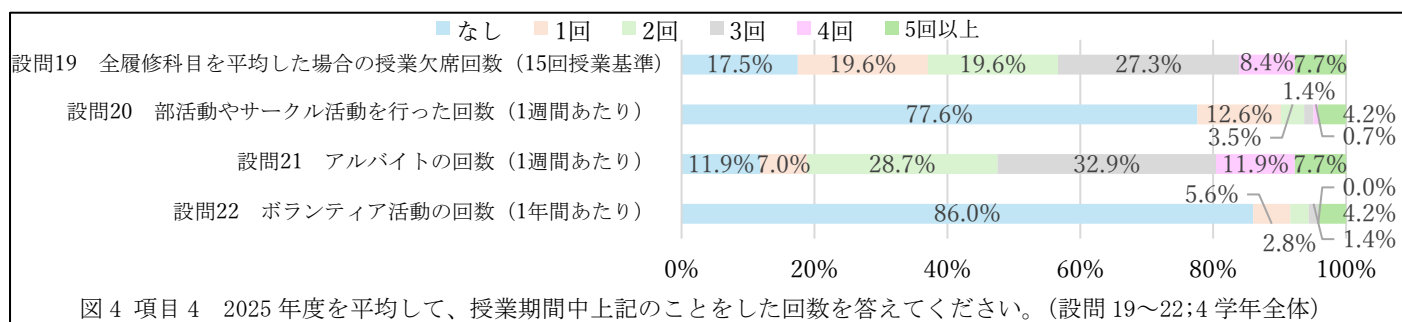
その一方で、設問9 教員への積極的な働きかけや、設問12 などの大学が提供する物理的な学修スペース（図書館）の活用においては、学生間に差がある。特に、設問13 学内の自習用教室については、約4割の学生が「全くしなかった」と回答している。

項目3「授業期間中一日あたり以下のことにかけた時間を答えてください。(設問 14:4 学年全体)」

設問 14 において、本コースは「1～3 時間」の層が合計 56.7% に達し、大学全体の 49.6%を上回っている。特に本コースでは「2～3 時間」の割合が高く、大学全体の 18.3%を大きく上回っている。この背景には、学年が進むにつれて、学内の自習用教室などを利用した勉強時間や、就職・資格取得に関わる勉強時間が多くなるという傾向が反映されていると考察される。高学年層が国家試験や就職活動を見据えて、より専門的かつ主体的な学習に取り組んでいることを裏付けていると考えられる。以上の結果から、本コースの学生は大学全体平均と比較して、授業外学修により多くの時間を割く傾向があることが示唆される。



項目4「授業期間中以下のことをした回数を答えてください。(設問 19～設問 22:4 学年全体)」

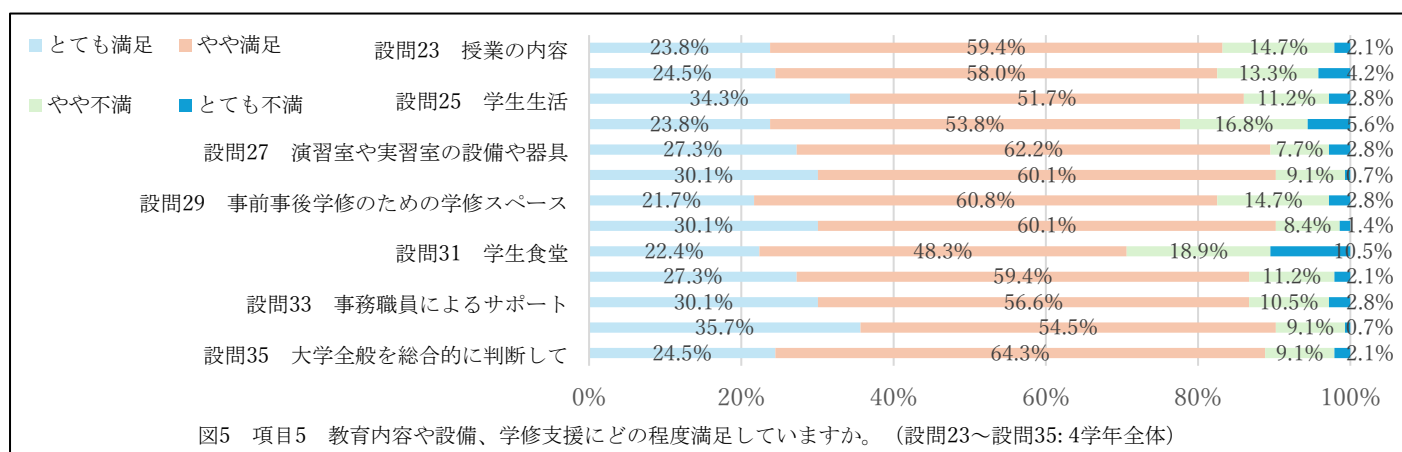


設問 19 では欠席 3 回以内までの合計が 84%に達しており、概ね良好な出席状況である。一方で、欠席回数 4 回および 5 回以上の層も一定数存在するため、セミナー等を通じて個別指導と修学支援を継続する。

設問 20 部活動や設問 22 ボランティアは約 8 割が「活動なし」であり、参加に消極的な傾向が顕著である。

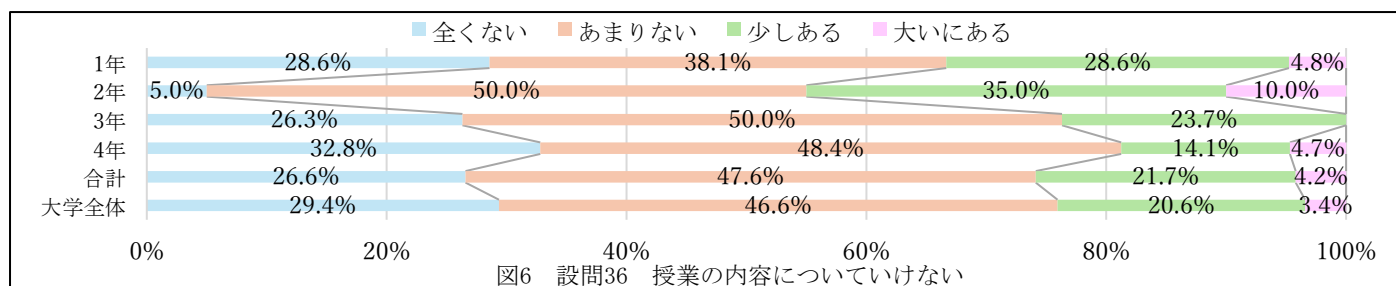
設問 21 アルバイトについては、「なし:11.9%」と答えた学生は僅かであり、残りの約 9 割の学生が何らかの頻度でアルバイトをしている。最多は「週 3 回:32.9%」、次いで「週 2 回:28.7%」となっており、週の半分程度をアルバイトに充てている。総じて、学生は「単位の修得」と「アルバイト」を優先しており、サークル活動やボランティア活動に時間を割く余裕や関心は限定的である。

項目5「教育内容や設備、学修支援にどの程度満足していますか。(設問 23～設問 35:4 学年全体)」

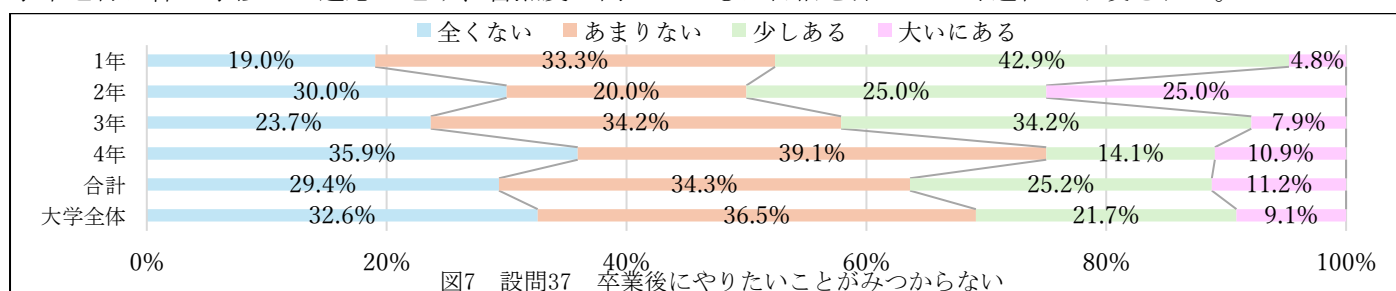


本項目の設問を以下の通り分類した。設問 23・24 を「教育関係」、25～31 を「設備関係」、32～35 を「進路支援」とする。「教育関係」は、80%を超える学生が肯定的（「とても満足」または「やや満足」）な評価を示した。「設備関係」では学修・支援インフラが高評価で、特に図書室や医療施設は満足度 9 割と高い。「進路支援」の肯定的な評価は 86.7%～90.2%と高い。特に設問 35「大学全般の総合判断」は、肯定的な評価の合計が 88.8%に及び、全体として良好な傾向にある。一方で、同項目における「とても不満」の回答は 0.7%～2.8%と、極めて低水準に留まっている。

項目 6 「いま次のような不安や悩みがありますか。(設問 36～設問 37)」



設問 36 における授業内容への不安（「少しある」「大いにある」の合計）は、2 年次をピークに高学年ほど減少する傾向が確認された。年次別推移を見ると、1 年次の 33.4%から 2 年次には 45.0%へと上昇し全学年で最大値を示しているが、これは専門科目の増加が影響していると推察される。対照的に、3 年次は 23.7%、4 年次は最小の 18.8%へと順次低下した。以上の結果から、2 年次において一時的な学業不安の増大が見られるものの、学年進行に伴い学修への適応が進み、習熟度の向上とともに自信を深めていく過程が示唆された。



設問 37 の学年別傾向を見ると、2 年次では「少しある:25.0%」と「大いにある:25.0%」の合計が 50.0%に達し、全学年で最高値を示した。この時期は、進路への漠然とした不安が深まる時期と推察される。一方、3 年次は「大いにある:7.9%」へと減少し、不安から現実的な模索段階へと移行したためと考える。4 年次では「全くない:35.9%」と「あまりない:39.1%」を合わせた進路確定層が 75.0%に達しており、卒業を目前に大半の学生が方向性を見出しているといえる。以上のことから、低学年の不安は学年進行に伴い、具体的な進路形成へと昇華されている。この意識変化に合わせ、設問 32 から 35 における学修支援策を最適化し運用していく。具体的には、1～2 年次には、臨床工学技士の役割や業務内容への理解を深めるとともに、専門科目の本格化に伴う不安に対し、教員が学生の声に耳を傾け、何に不安を感じているのかを言語化させる支援を重視している。3 年次には、学内実習を通じて臨床工学技士が関わる代表的な業務分野を体験させることで、学生自身が適性や関心を主体的に把握できるよう支援している。4 年次では、進路が概ね確定した学生を対象に、卒業後の社会移行を見据えた支援へ重点を移す。具体的には、医療機関への就職支援とともに、職場環境や業務内容を踏まえた助言を行い、臨床工学技士として円滑に職業生活を開始できる支援体制を整えている。

項目 7 「コース独自設問:大学入学時と比較した専門的知識の修得状況（設問 53～75）」

7-1 倫理性・使命感と対人態度の形成（設問 53～56）

臨床工学技士に不可欠な倫理観や対人能力は、高い修得実感が示された。

- ・ 設問 53 「使命感」：4 年次において「十分付いた:31.3%」と「かなり付いた:34.4%」の合計が 6 割を超え、職業意識への向上が確認できる。
- ・ 設問 54, 55 「守秘義務と人権尊重」：4 年次では「十分付いた」が両設問とも約 4 割に達し、医療従事者としての規範意識が定着している。
- ・ 設問 56 「思いやりの心」：4 年次では「十分付いた:39.1%」、「かなり付いた:31.3%」が約 7 割を占め、対人援助職としての基盤が形成されている。

以上の結果から、学年進行に伴い、臨床工学技士としての高い専門的倫理観と対人態度が確立される過程が示唆された。

7-2 コミュニケーションと協働（設問 60～64）

学年進行に伴い、対人・協働能力は着実に向上していると推察する。

- ・設問 60「コミュニケーション」：3 年次の「十分付いた：28.9%」から、4 年次には 34.4%に伸長した。
- ・設問 61「他者との協働」：4 年次は「十分付いた：40.6%」に達し、3 年次「十分付いた：28.9%」と比較して、チーム医療を見据えた能力向上が確認できる。
- ・設問 64「他職種連携」：全学年では「十分付いた：30.1%」に留まるが、4 年次では「十分付いた：32.8%」まで上昇し、実践的な連携意識が芽生えている。

7-3 医学的知識（設問 65, 66）

医学的基礎知識については、学年進行に伴い着実な向上が認められた。

- ・設問 65「人体の構造と機能」：全学年では「かなり付いた：25.2%」だが、4 年次には「十分付いた：28.1%」に達し、修得感の高まりが確認された。
- ・設問 66「疾病」：4 年次は「十分付いた：23.4%」と「かなり付いた：35.9%」の合計が過半数に達しており、知識の定着が伺える。

7-4 工学に関する知識（設問 67～70）

- ・設問 67「電気・電子工学」：肯定的回答（「十分」「かなり」の合計）は 1 年次 57.1%から 4 年次 43.7%へ低下した。これは学修の深化により領域の広さを再認識し、自己評価が厳格化したためと推察される。
- ・設問 69「医療情報工学」：学年進行に伴い肯定的回答は増加傾向にある。1 年次の 28.6%から 3 年次には 57.9%へ上昇した。4 年次は 54.7%と微減したが、半数以上が高い修得感を維持している。
- ・設問 70「機械工学」：学年進行に伴う単純な上昇傾向とは異なり、肯定的回答は 3 年次の 55.3%をピークとし、4 年次には 32.8%へと下降する特異な推移を示した。これは国家試験対策の本格化により、知識不足を客観的・批判的に再認識したためと考えられる。

7-5 臨床工学に関する知識（設問 71～75）

各専門分野における肯定的回答（「十分」「かなり」の合計）は、低学年次と比較して高学年次で大幅に上昇する傾向が確認された。

- ・設問 71「生体機能代行装置学」：1 年次は 33.3%から 3 年次には 65.8%まで急増したが、4 年次には 54.7%へと低下した。
- ・設問 73「医用治療機器学」：1 年次は 23.8%であったが、3 年次には 60.5%へと大幅に伸長し、4 年次も 59.4%と高い水準を維持した。
- ・設問 74「生体計測装置学」：1 年次の 19.1%から、4 年次は 53.1%と学年進行に従い修得感が高まっている。
- ・設問 75「安全管理」：1 年次の 23.8%から、4 年次の 59.3%に至り、着実な向上が確認された。

まとめ

本調査の結果、臨床工学コースにおける教育目標は、概ね達成されていることが確認された。自己評価調査の項目 1 において、学生の約 8 割が「目標とする力」を身に付けたと実感しており、特に「協働力」および「自立性」の項目において顕著な伸長が認められた。

項目 2 の学修環境の活用状況については、学修支援システム（manaba）等のデジタルツールの利用が定着している一方、学内の物理的な自習用教室の活用には改善の余地が残されている。項目 3 における学修態度は特筆すべき点であり、大学全体と比較して、授業外学修時間が長い傾向にある。また、項目 4 では、約 9 割の学生がアルバイトに従事しながらも高い出席率を維持しており、学業と私生活を両立させている実態が示された。

項目 6, 7 の学年進行に伴う心理的变化と専門知識の修得状況は、2 年次に専門科目増加に伴う不安や進路への不透明感が一時的に強まる傾向にある。しかし、学年の進行とともに学修習熟度は向上し、4 年次には大半の学生が進路を確定させるとともに、臨床工学技士として必要な専門知識、および倫理観を確立するに至っている。

2025 年度 健康メディカル学部 医療科学科 スポーツサイエンスコース 学修行動と学修成果の調査アンケートの解析

スポーツサイエンスコースは、2025 年度に新設されたコースである。したがって、本アンケート調査の対象は、1 年生（1 期生）54 名のみである。そのうちの約半数は、強化指定部（男子バスケットボール部）に所属している。尚、2025 年度の専任教員は 3 名体制である。これらを踏まえた上で、アンケート調査の結果について考察する。

1. 共通設問の分析

(1) 項目 1「本学の『目標とする力』がどの程度身に付いたかを教えてください。（設問 1～6）」

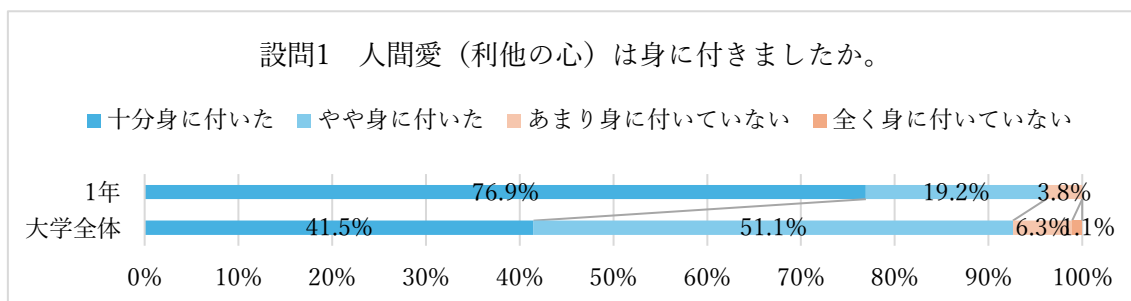
設問 1～6 において、本コースの結果は大学全体の結果を上回るものであった。

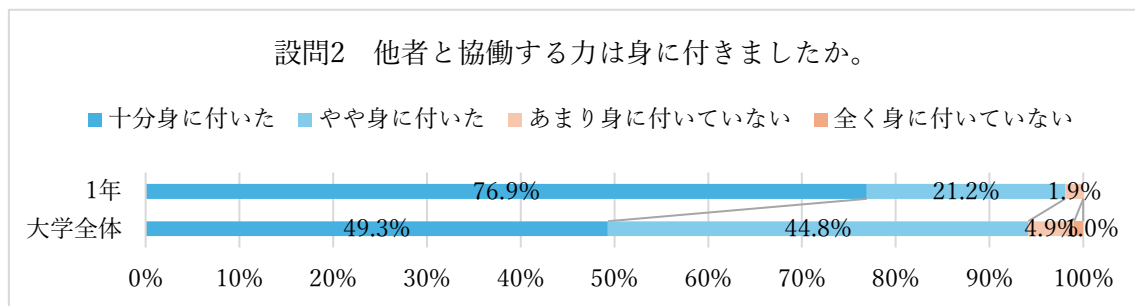
特に、設問 1 と 2 は大学全体の結果を大幅に上回り、8 割弱の学生たちが「十分身に付いた」と回答した。

本コースではフレッシュセミナーⅠの 2 クラスを 1 つにまとめ、年間 30 回の授業をすべて合同で実施した。2 名の教員で全学生を指導する複数担任制のスタイルである。

また、フレッシュセミナーⅠA（前期・月曜 1 限）の前には、正門で挨拶運動とキャンパス周辺の清掃活動を実施した。さらに、夏休みを利用して校外学習を実施し、帝京大学 八王子キャンパスにあるスポーツ医科学センターを全学生で見学した。セミナー懇親会やスポーツ交流会なども全学生で実施した。

これら全学生での取り組みを通じて、1 年生には一体感が生まれたように感じる。また、「1 期生としての自覚を持て」と常日頃から指導してきたこともあり、使命感も生まれたように感じる。設問 1～6 の結果は、これら全学生での取り組みが好影響を与えたものとする。



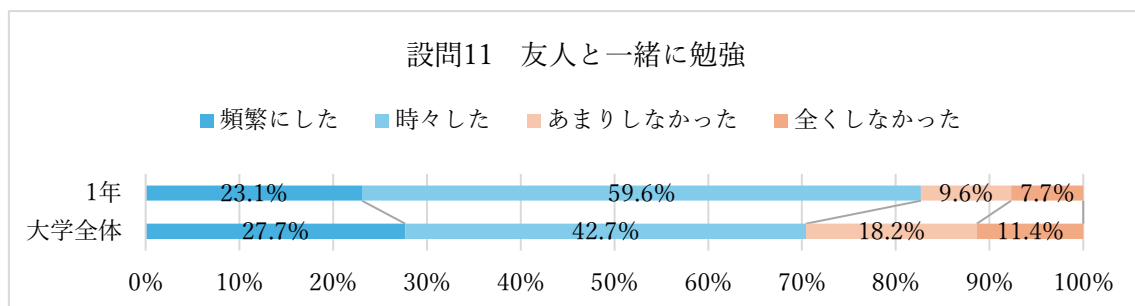


(2) 項目 2「2025 年度の授業に関連して、以下のことをどのくらいしましたか。(設問 7～13)」

設問 7～13 において、本コースの結果は大学全体と同様であった。

ただし、設問 11 は本コースの特徴を示しており、全学生での様々な取り組みが『友人と行動を共にする』という習慣に結びついているものと考えられる。

また、本コースには、強化指定部（男子バスケットボール部）の学生たちが多く在籍しており、学校生活のパターンが似ていることも『友人と行動を共にする』という習慣に結びついているものと考えられる。



(3) 項目 3「2025 年度を平均して、授業期間中一日あたり以下のことにかけた時間を答えてください。(設問 14～18)」

設問 14～18 において、本コースの学生たちの特徴は、部活動をする学生が多いため「学内で過ごす時間」が非常に長く、「授業時間外に行った予習や復習、授業課題のための学修時間」「本（電子書籍を含む）を読んだ時間」が非常に短いというものであった。

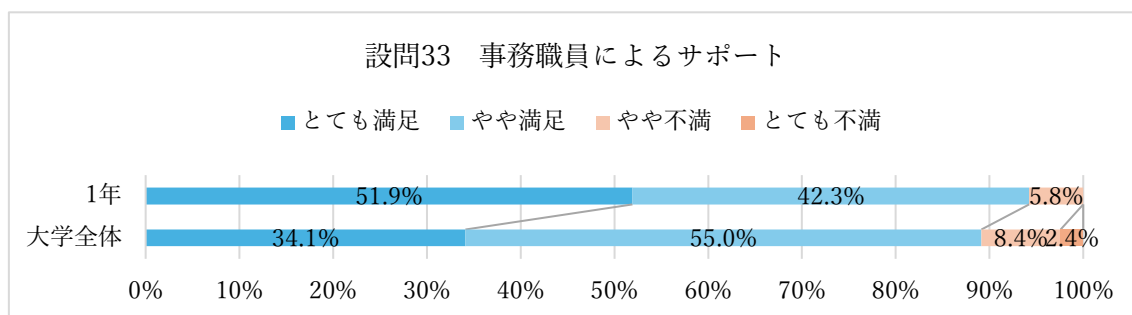
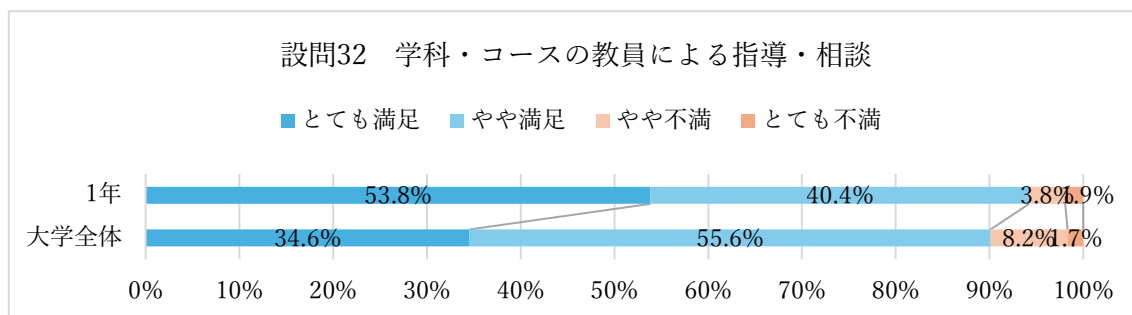
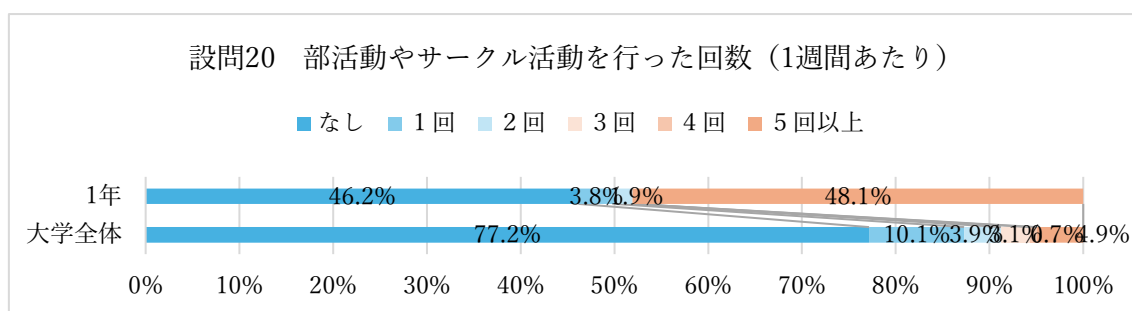
遠方から通学している学生も多いため、電車内での時間を有効に使うよう指導していきたい。

(4) 項目 4「2025 年度を平均して、授業期間中に以下のことをした回数を答えてください。(設問 19～22)」

項目 5「本学の教育内良いや設備、学習支援にどの程度満足していますか。(設問 23～35)」

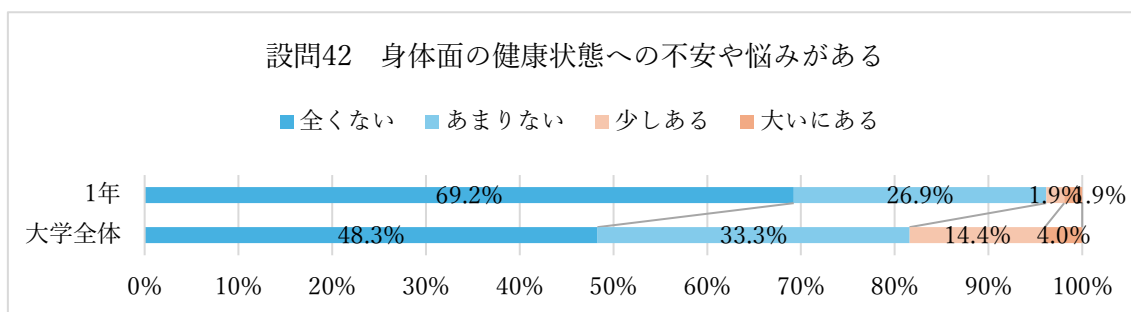
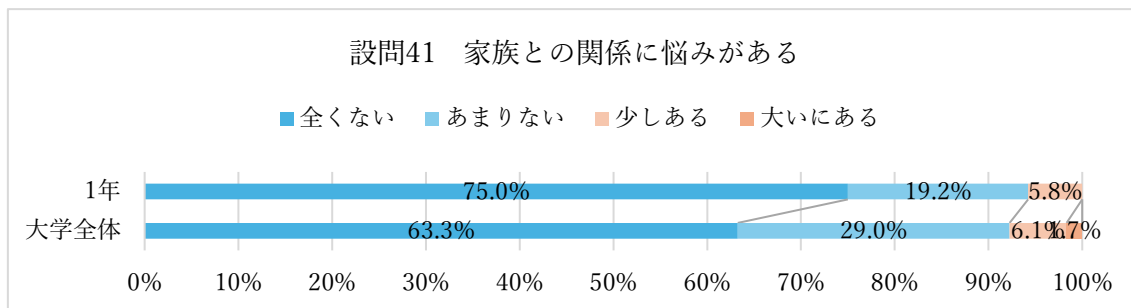
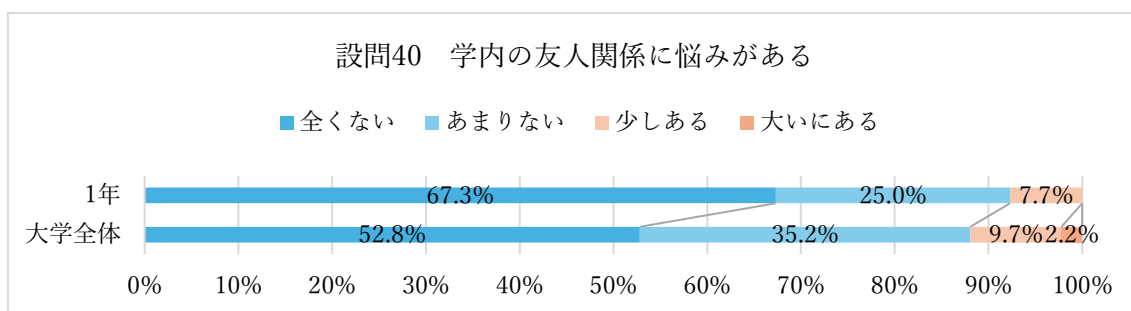
設問 19～35 において、本コースの学生たちの特徴は、「部活動やサークル活動を行った回数」が非常に多く、「学生生活」「講義教室の設備」「演習室や実習室の設備や器具」「メディアライブラリー（図書館）の設備や学修環境」「事前事後学習・課題のための学修スペース」「保健室や付属の医療施設」「学生食堂」に対する満足度が非常に高いというものであった。本コースの学生たちは部活動をする学生が多いため、医療施設や学生食堂などの学内施設を利用する機会が多いことがこれらの結果に反映されているものと考えられる。

また、設問 32～35 において、本コースの学生たちの特徴は、「学科・コースの教員による指導・相談」「事務職員によるサポート」「就職支援室による進路・就職に関する支援」に対する満足度が非常に高いというものであった。授業、学内行事、部活動などにおいて、学生たちと教職員との距離が近いことがこれらの結果に反映されているものと考えられる。



(5) 項目 6「いま次のような不安や悩みがありますか。(設問 36～44)」

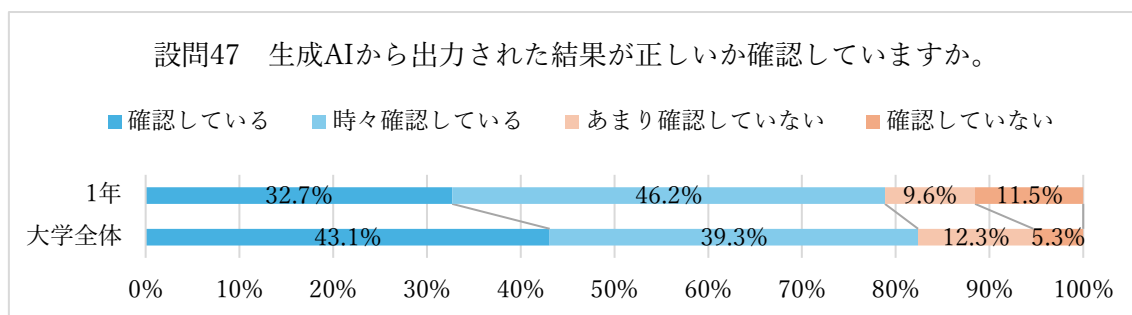
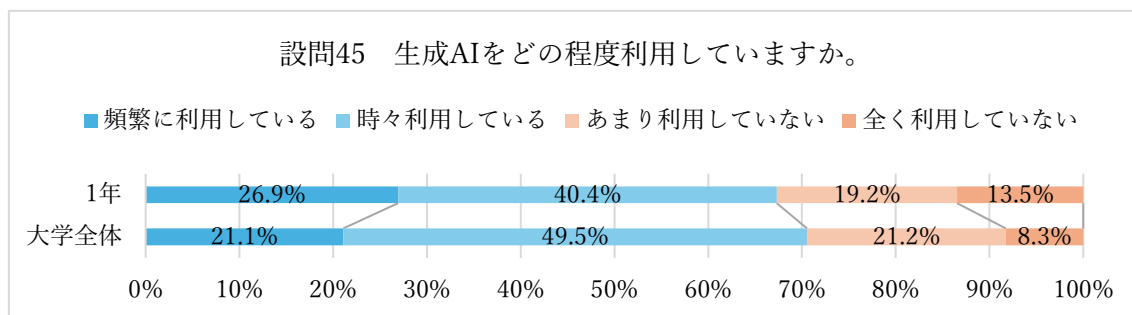
設問 36～44 において、本コースの学生たちの特徴は、「友人関係」「家族との関係」「心身の健康状態」に対する悩みが全くない者が多いというものであった。運動やスポーツをするのは、心の不健康を改善するのにも効果的とされている。心身ともに不健康な学生たちが急増している現代において、運動やスポーツは何よりも大切である。資格対策や就活、そして社会人として仕事をしていく上でも、最後まで粘り強く取り組めるかは体力にかかっている。いくら知的能力を磨いても、心身の健康と十分な体力がなければ、その能力を持続して発揮することはできない。大学において部活動やサークル活動をすることは、様々な点において好影響を与えるものと考えられる。



(6) 項目 7「デジタルツールに関して教えてください。(設問 45～50)」

設問 45～50 において、本コースの学生たちの特徴は、「生成 AI を課題やレポートの作成に頻繁に利用している」ものの、「出力された結果の是非をしっかり確認していない」者が多いというものであった。

多くの学生たちが生成 AI を利用する現代において、その正しい活用の仕方を教員サイドも学び、学生たちの指導に活かしていく必要があると考えられる。

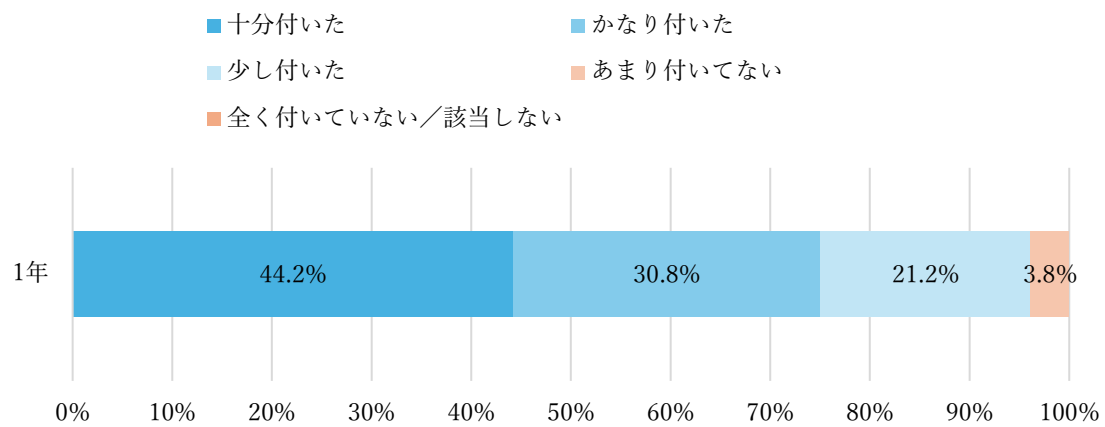


(7) コース独自の設問「大学入学時と比べて、以下に挙げる能力は身に付きましたか。(設問 51～82)」

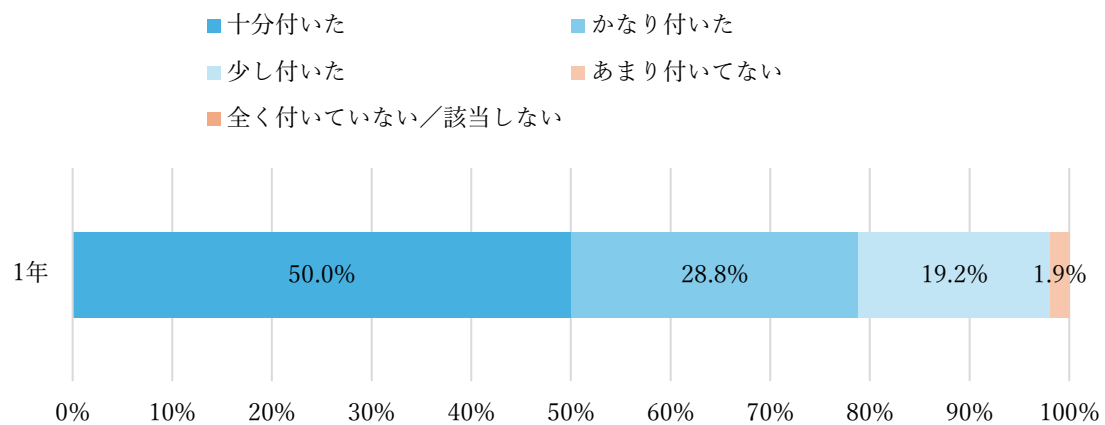
設問 51～82 において、現時点では他の学年との比較ができないが、「規則や約束を守る態度」「健康や生活を自己管理する力」が十分身に付いたとの回答が非常に多かった。年間を通じた全学生での様々な取り組みが好影響を与えているものと考えられる。

一方で、「栄養学に関する基礎知識」「救急医学に関する基礎知識」「研究倫理への理解」が全く身に付いていないとの回答が多かった。原因は、これらの専門基礎科目が2年次以降の開講になっていることであると考えられる。

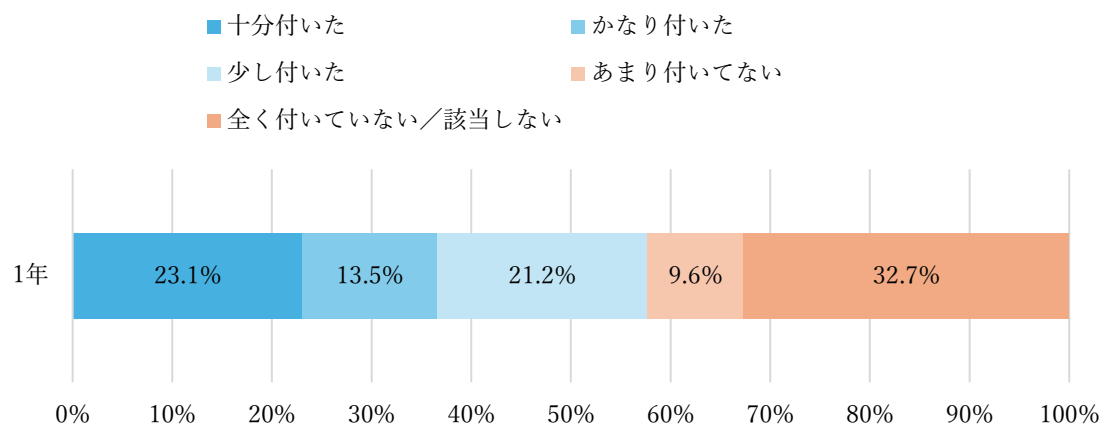
設問54 規則や約束を守る態度

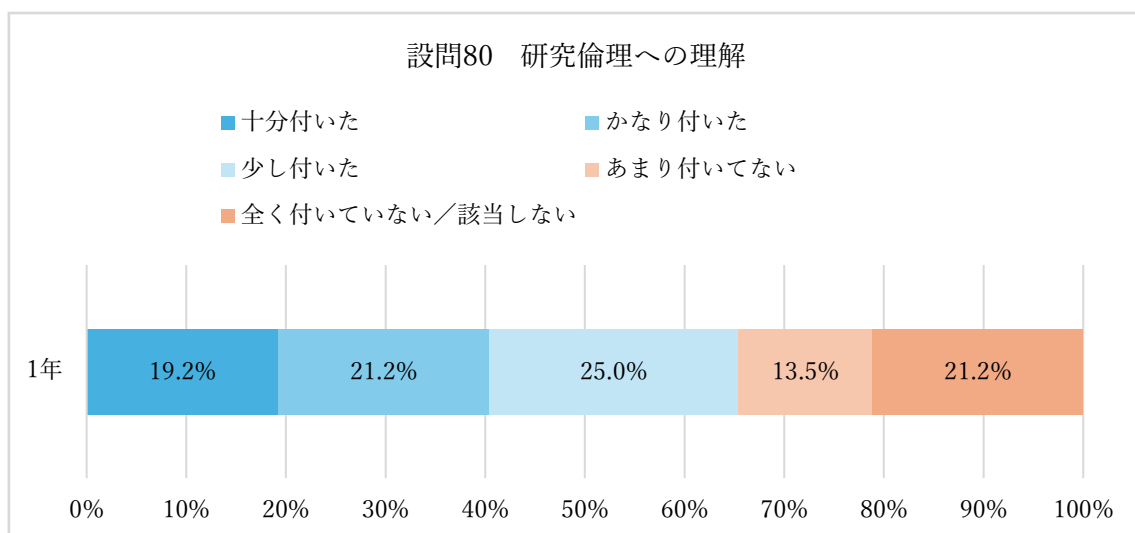
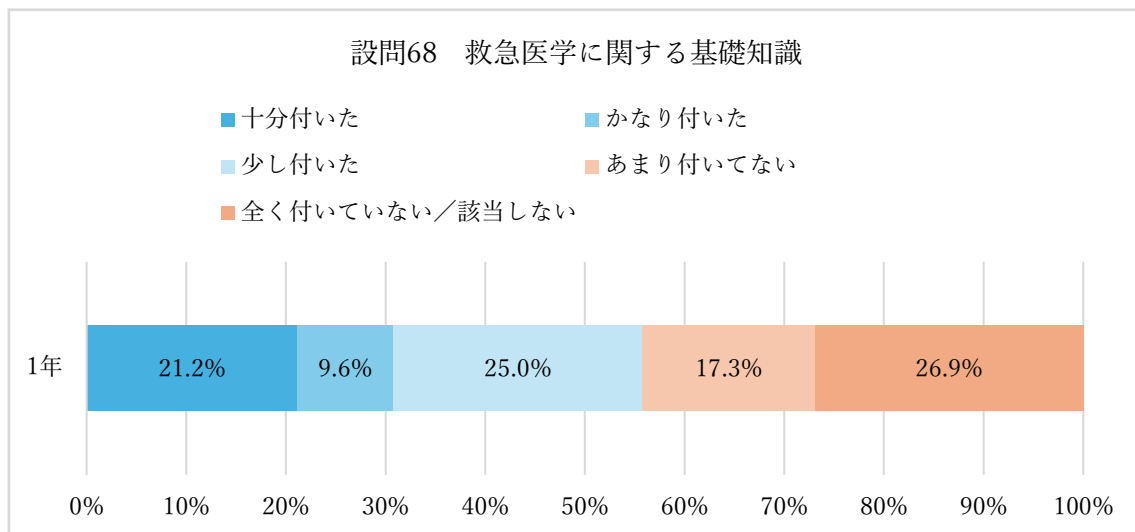


設問55 健康や生活を自己管理する力



設問65 栄養学に関する基礎知識





まとめ

2025 年度 学修行動と学修成果アンケート結果の考察を行った。

共通設問の分析では、年間を通じた全学生での様々な取り組みが、学修行動と学修成果に好影響を与えていると考えられた。

コース独自の設問の分析では、現時点では他の学年との比較ができないため、次年度以降の結果を待つこととする。尚、2026 年度入学の 1 年生（2 期生）は 84 名（1・2 年生合計 138 名）、専任教員は 5 名体制でスタートしている。